令和５年度
琉球大学
SDGs に関する教職員・学生
アンケート調査報告書

University of the Ryukyus

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

琉球大学は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

琉球大学 SDGs 推進室

目　次

調査概要・・・ 1

【教員・職員】

回答者の基本属性・・ 2

SDGs の理解度・・・ 3

課題解決の取組・・・ 8

重点的に取組むべき目標・・ 14

教員の SDGs との関わり・・ 18

今後の SDGs の取組に関する意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

取組事例　－教育 WG の取組－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

取組事例　－研究 WG の取組－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

取組事例　－社会貢献 WG の取組－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

取組事例　－業務・ガバナンス WG の取組－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

取組事例　－カーボンニュートラル推進チームの取組－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

【学部学生】

回答者の基本属性・・・ 30

SDGs の理解度・・・ 31

課題解決の取組・・ 33

【大学院学生】

回答者の基本属性・・・ 37

SDGs の理解度・・・ 38

課題解決の取組・・ 40

まとめ・・ 44

調査概要

1．調査の目的

- SDGs（持続可能な開発目標）への取組について、教職員及び学生の理解度、考えや実践等に関するアンケート調査を行うことで、本学における SDGs 活動のチェックを行い、改善しながら SDGs 達成に貢献することを目的としています。

2．調査方法・集計表の見方

- 調査方法
  教職員及び学生（学部学生・大学院学生）を対象に、Web 形式によるアンケートを実施しました。
- 集計表の見方
  本報告書に記載する表の数値は、小数点以下第 2 位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも 100%とはなりません。

3．回収結果

- 調査実施日
  教員・職員　2023 年 12 月 5 日～2024 年 1 月 9 日
- 教員（常勤・非常勤：回答者数 200 人）
- 職員（常勤・非常勤：回答者数 363 人）
- 調査実施日
  学部学生・大学院学生　2023 年 9 月 28 日～12 月 13 日

- 学部学生　（回答者数 614 人）
- 大学院学生（回答者数 87 人）

● SDGs（持続可能な開発目標）とは・・・

すべての人々にとってよりよい、より持続可能な未来を築くための青写真です。貧困や不平等、気候変動、環境劣化、繁栄、平和と公正など、私たちが直面するグローバルな諸課題の解決を目指します。SDGs の目標は相互に関連しています。誰一人置き去りにしないために、2030 年までに各目標・ターゲットを達成することが重要です。

【出典：国際連合広報センター】

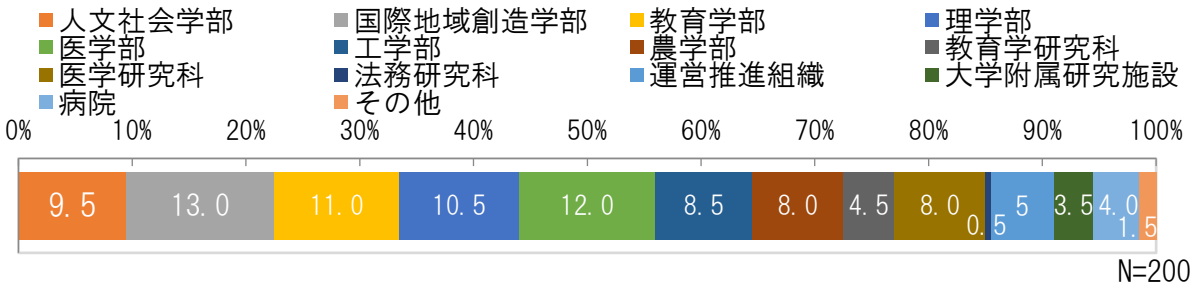
本学では、第４期中期目標・中期計画において、教育・研究等活動における SDGs の取組の推進と島嶼地域の課題解決に向けた多様なステークホルダーとの連携・協働を掲げており、これらをスムーズに進めていくためには、何よりも教職員の SDGs に関する意識啓発（自分ごと化）と自発的アクションを促していくことが求められます。

回答者の基本属性

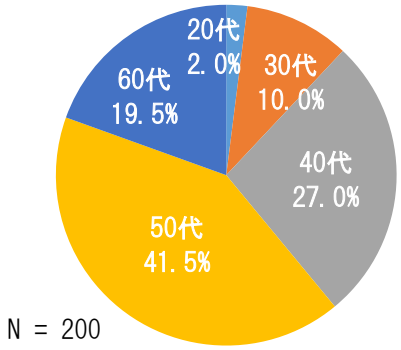
教員・職員

教員・職員について

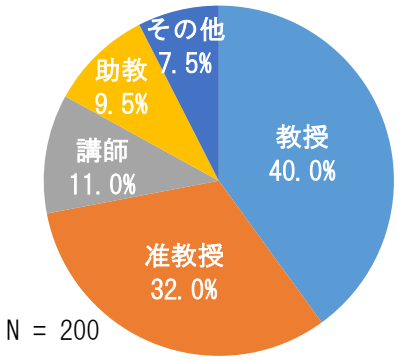
教員の属性



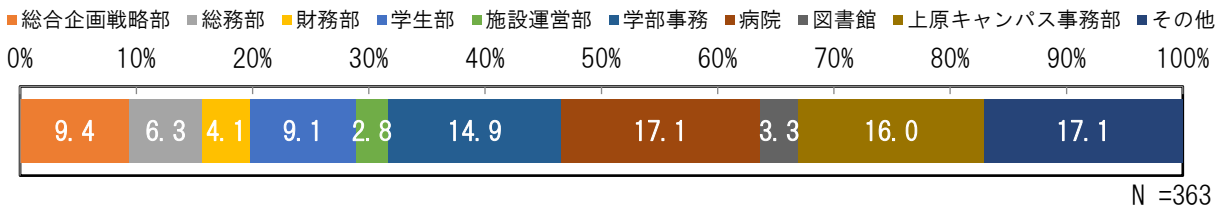
【年代】



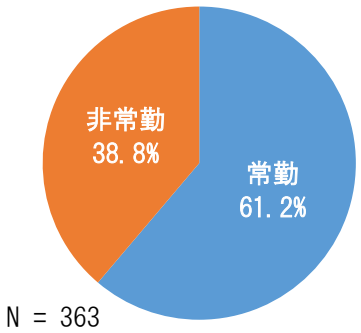
【職名】



職員の属性



【労働形態】



SDGs の理解度

教員・職員

SDGs の理解度は教員が 9 割と高い

●設問：SDGs（持続可能な開発目標）の理解度

SDGs の理解度について問う設問では、「教員」のうち「内容をよく理解している」と回答した割合が 17.0%に対し「職員」は 6.3%と、10.7 ポイントの開きがあります。教員は講義等で実践の機会があるものの、職員について実際の行動に結びつけられるような取組を展開していくことが重要です。

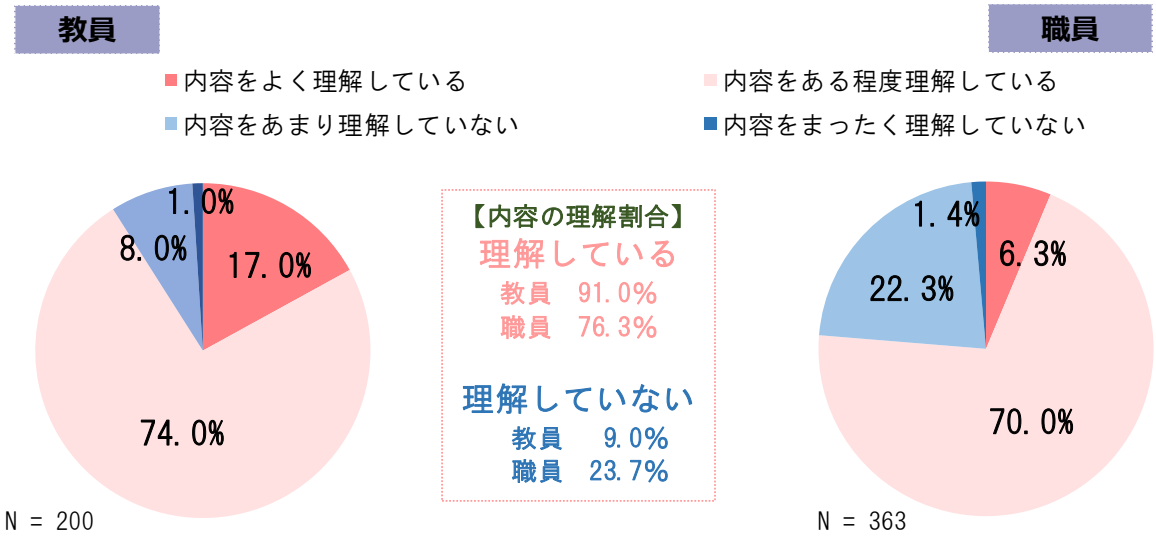


図1　SDGs の理解度

教員の SDGs の理解度は、職位別では、「内容をよく理解している/内容をある程度理解している」と回答した「講師」が 100.0%で、「教授」は 93.8%、「准教授」は 90.6%となっています。一方、「内容をあまり理解していない」と回答した割合が「助教」で 21.1%と他の職位より理解度が低くなっています。

所属別では、「内容をあまり理解していない/内容をまったく理解していない」と回答した割合が「理学部」で 19.1%、「医学研究科」で 18.8%となっています。一方、「工学部」「農学部」「教育学研学科」「法務研究科」で「内容を理解している/内容をある程度理解している」との回答率が 100.0%となっており、所属により理解度に差があります。

以上のように、教員の約 9 割が SDGs の内容を理解していることから、研究テーマと SDGs の目標やターゲットとを結びつけるなどの工夫で、既に SDGs の取組を行っている「気づき」につながることも考えられます。

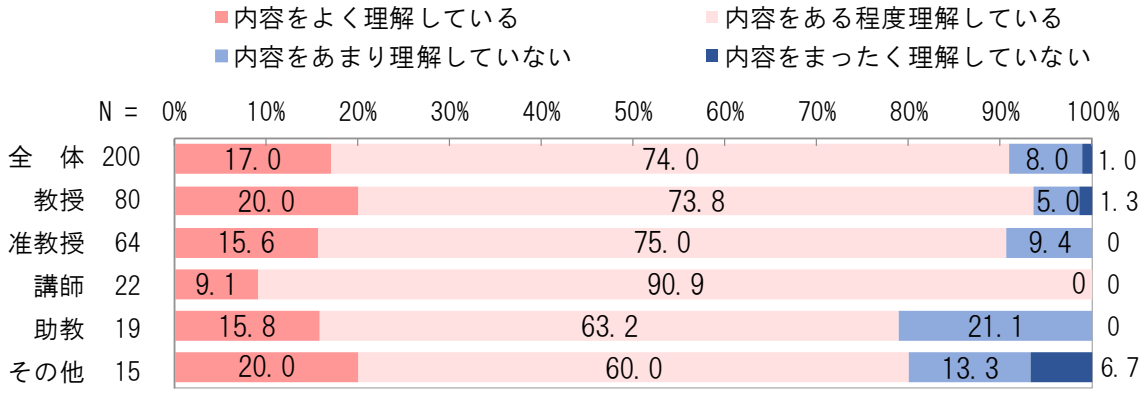


図2　教員・職位別 SDGs の理解度

教員

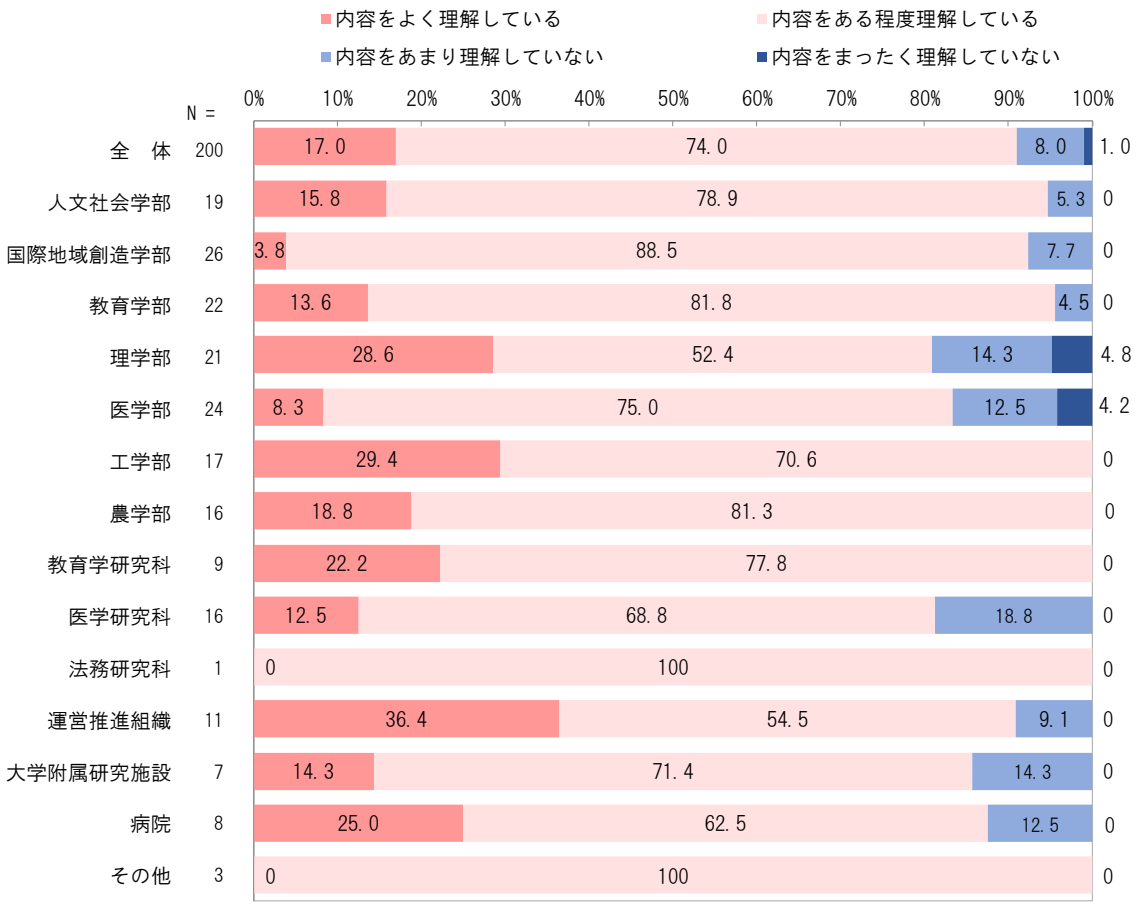


図3　教員・所属別 SDGs の理解度

教員の SDGs の理解度は、年代別では、「内容をよく理解している/内容をある程度理解している」が「60 代」で 97.5%、「50 代」で 94.0%、「40 代」で 87.0%、「30 代」で 85.0%となっています。一方、回答者数が少ないため参考ですが、「20 代」の理解度は 50.0%に留まっています。

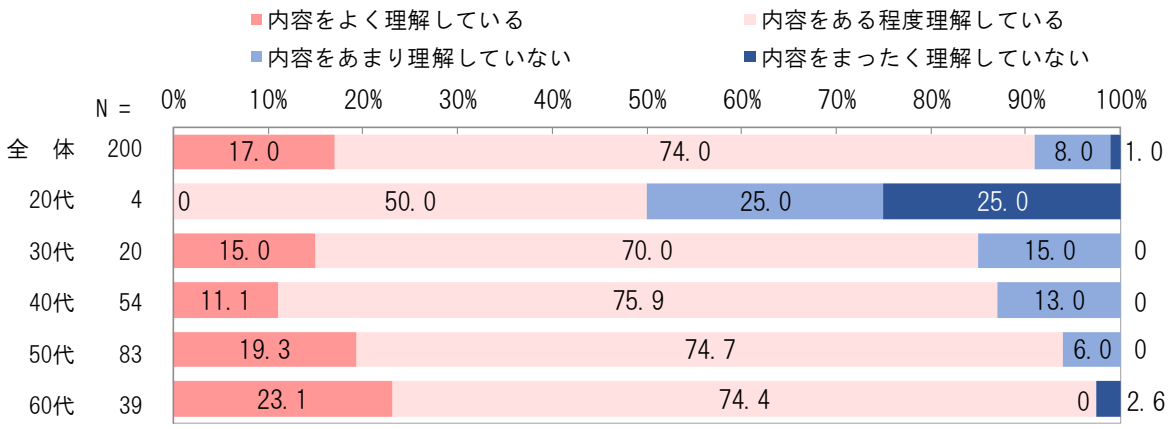


図4　教員・年代別 SDGs の理解度

職員のSDGsの理解度は、所属別に、「内容をよく理解している/内容をある程度理解している」と回答した割合が「総合企画戦略部」で 91.1%、次いで「学生部」が 87.8%、「図書館」が 83.3%と続きます。

「内容をあまり理解していない/内容をまったく理解していない」が「病院」で 35.5%となっており、「学部事務」が 31.5%と続きます。

労働形態別では、「内容をよく理解している/内容をある程度理解している」と回答した「非常勤職員」は 77.3%、「常勤職員」は 75.7%です。「内容をあまり理解していない/内容をまったく理解していない」では「常勤職員」は 24.3%、「非常勤職員」は 22.7%となっています。

職員

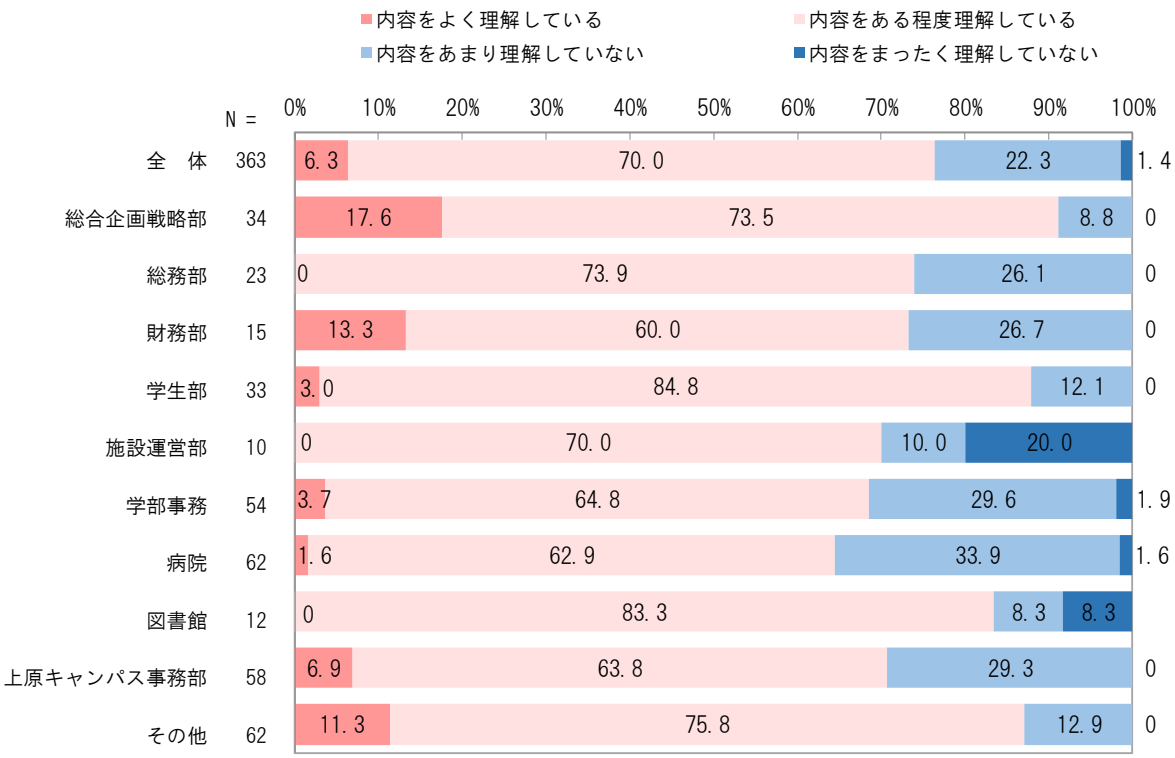


図5　職員・所属別 SDGs の理解度

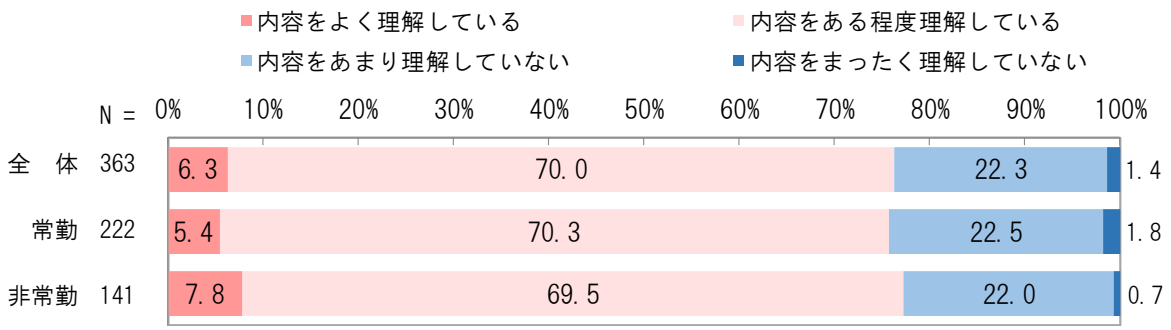


図6　職員・労働形態別 SDGs の理解度

●設問：SDGs の理解度×課題解決の取組

教員では、SDGs の「内容をよく理解している」と回答した 73.5%が業務や日常生活で取組を実践しており、「内容をまったく理解していない」と回答した 50.0%は取組をしていません。理解度が高いほど、課題解決の取組を実践していることがわかります。

職員についても「内容をよく理解している」と回答した 78.3%が業務や日常生活で取組を実践しています。

「内容をまったく理解していない」では、課題解決の取組を「していない」が教員で 50.0%、職員で 60.0%とともに半数以上と高い割合になっています。

教員

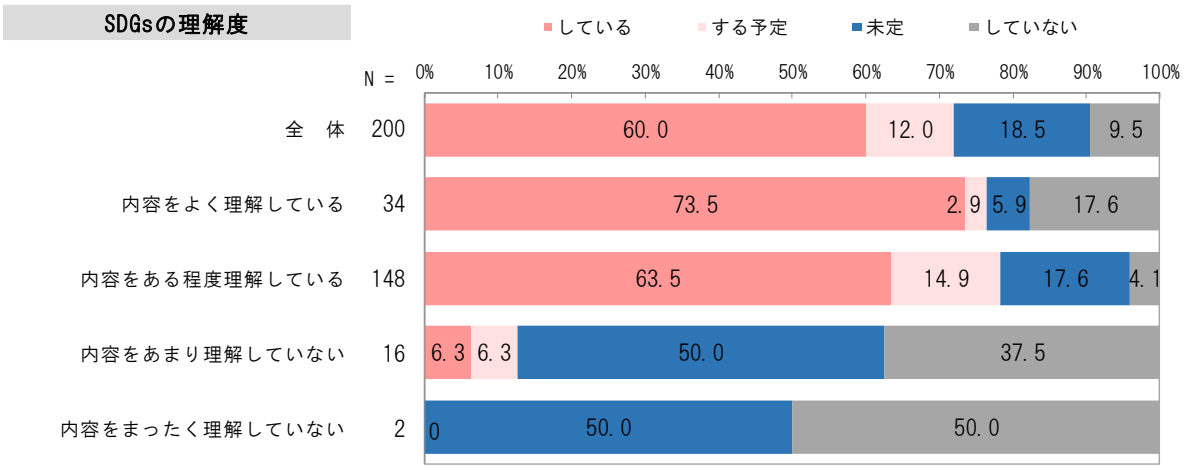


図7　教員・課題解決の取組状況×SDGs の理解度

職員

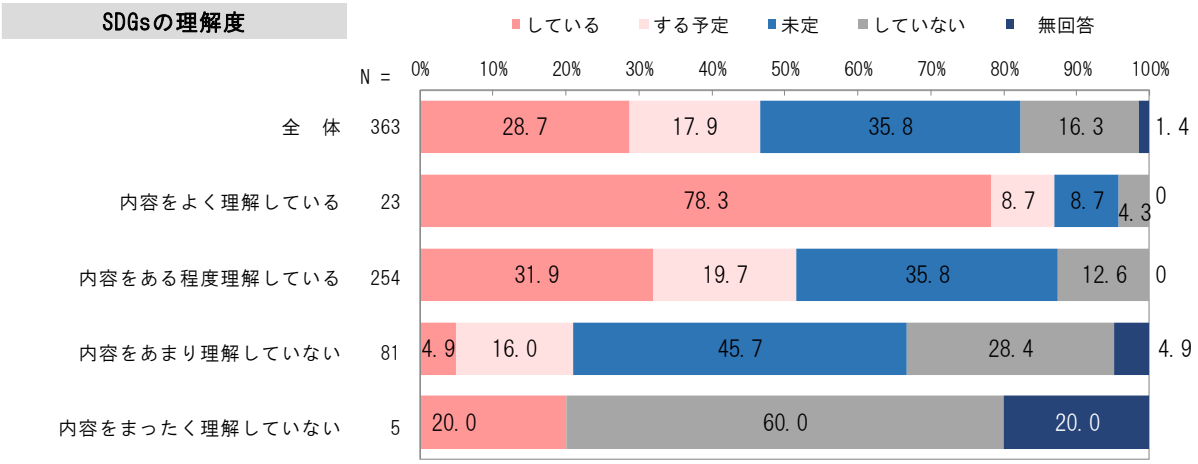


図8　職員・課題解決の取組状況×SDGs の理解度

●設問：SDGs の理解度×SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

教員では、SDGs の「内容をよく理解している」と回答した 73.5%が自身の取組と関連付けていると回答、「内容をまったく理解していない」と回答した 50%は、取組は「していない」となっています。

職員も「内容をよく理解している」の 82.6%が自身の取組と関連付けて実践しています。「内容をまったく理解していない」では「していない」の割合が高く、60.0%となっており、自身の取組と関連付けた実践ができていないことがうかがえます。

教員、職員ともに内容をよく理解していない方の「未定」の割合が高く、学内や日常生活において SDGs の掲げているゴールとターゲットについて関わりを見出すことが出来ていません。実例など広報や周知などの方策を講じることで、自身の生活と紐づいているという発見があると思われます。

教員

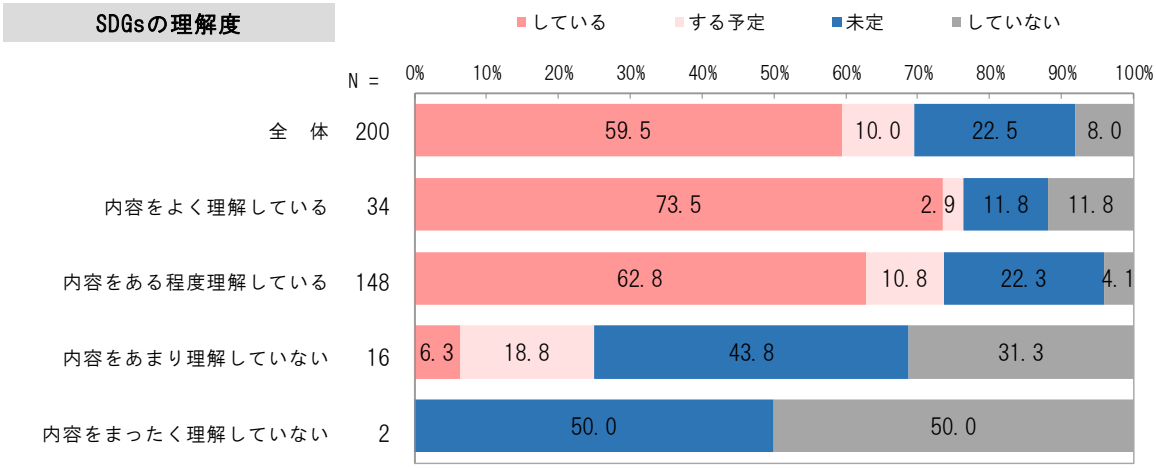


図9　教員・SDGs に合わせた自身の取組×SDGs の理解度

職員

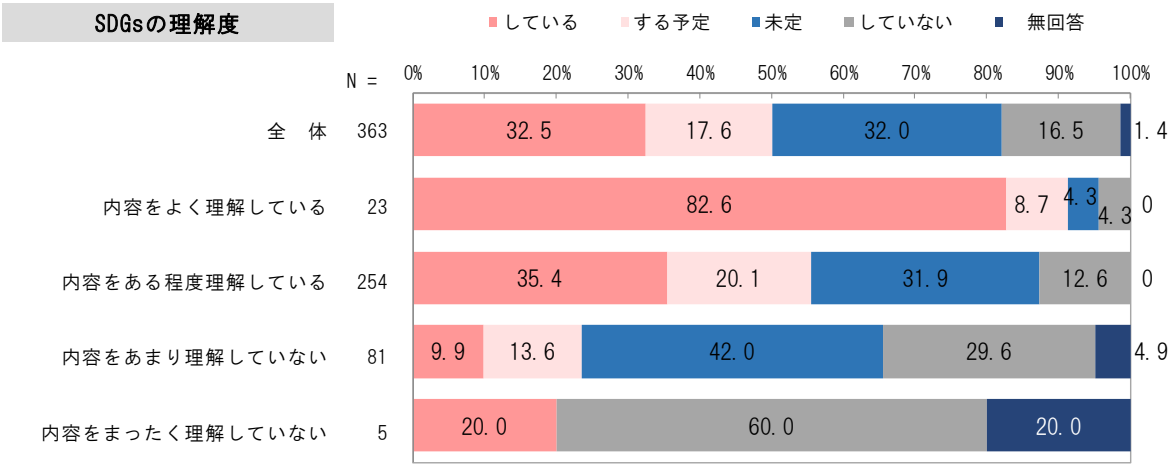


図10　職員・SDGs に合わせた自身の取組×SDGs の理解度

課題解決の取組

教員・職員

取組は重要だが、日々の生活の優先度の方が高い

●設問：SDGs の印象

職員では「取組は重要と考えるが、日々の生活に比べると、優先度は下がる」が 64.2%で半数以上です。また「目新しさはなく、すでに自分で取り組んでいるものである」が 25.3%と SDGs が日常に浸透していることもうかがえます。

SDGs を理解していることで、日々の生活の中の取組と SDGs の繋がりが分かる職員が一定数いることが分かります。少数ですが 3.1%が「そもそも知らない/自分には関係がない」と回答しており、SDGs の方針である「誰一人置き去りにしない」ことが日常生活の事柄と関連しやすいことを確認できる機会を作る必要があると思われます。

職員

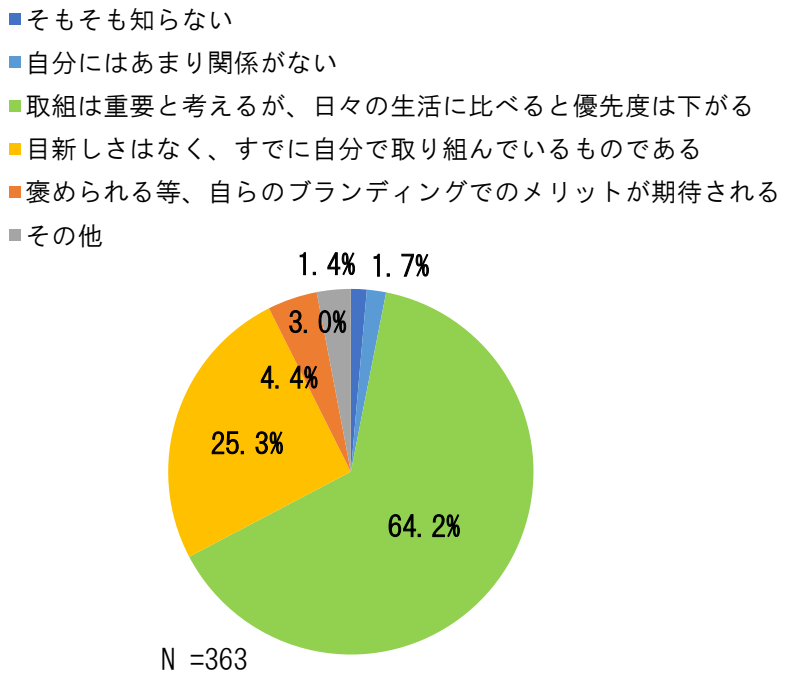


図11　SDGs の印象

●設問：SDGs を知った経緯（複数回答）

SDGs を知るに至った経緯については、「テレビ、インターネット、新聞、雑誌などのメディア」が教員で 86.0%、職員で 90.6%となっています。

その他の回答では、教員は学会、書籍などからの認知、職員は職場や業務での関わりを通じての認知があげられています。大学ならではのアカデミックな立場や業務から、産官学民の協働や知の実践の取組による教職員の認知の向上につながっていると言えます。

教員・職員

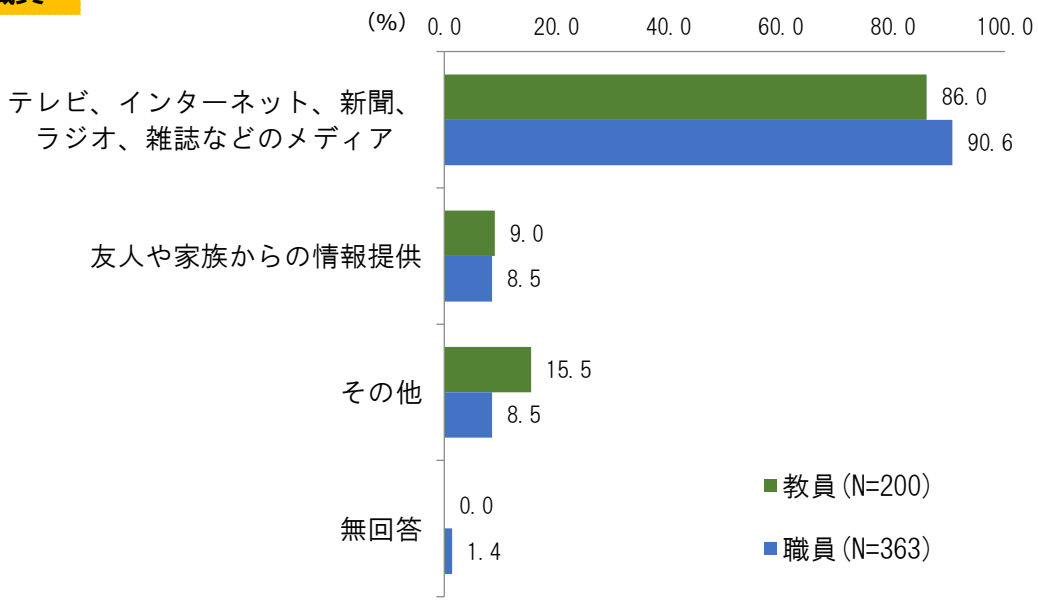


図12　SDGs を知った経緯

●設問：SDGs の理解のための情報収集・学習

SDGs の理解のための情報収集や学習の取組状況については、教員で 54.0%、職員で 17.9%が取り組んでいると回答しています。

教員は、授業や研究等の様々な場面で SDGs の取組内容に触れる機会が多くあることが想定されます。

一方、職員は、SDGs について考えることや活動する機会が業務上あまり求められていないと意識していることが想定されます。職員については、日常の業務に SDGs を紐づけるような取組を紹介する機会等を設けることで、SDGs 理解度の向上に繋がると思われます。

教員　　**職員**

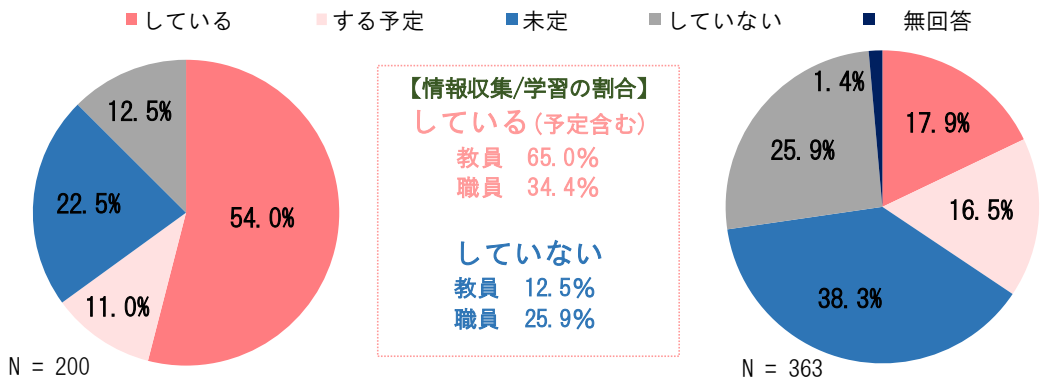


図13　SDGs の理解のための情報収集・学習

●設問： SDGs の課題解決の取組

社会課題解決の取組は、教員の 60.0%が実践しているとの回答に対して、職員は 28.7%となっており、開きがあります。教員の所属では、「病院」が 37.5%となっており、取組度が低く現れていますが、病院での業務は SDGs の達成の社会課題解決に直結しており、SDGs の取組は自身の生活とかけ離れた事柄ではないことを理解してもらう必要があると思われます。

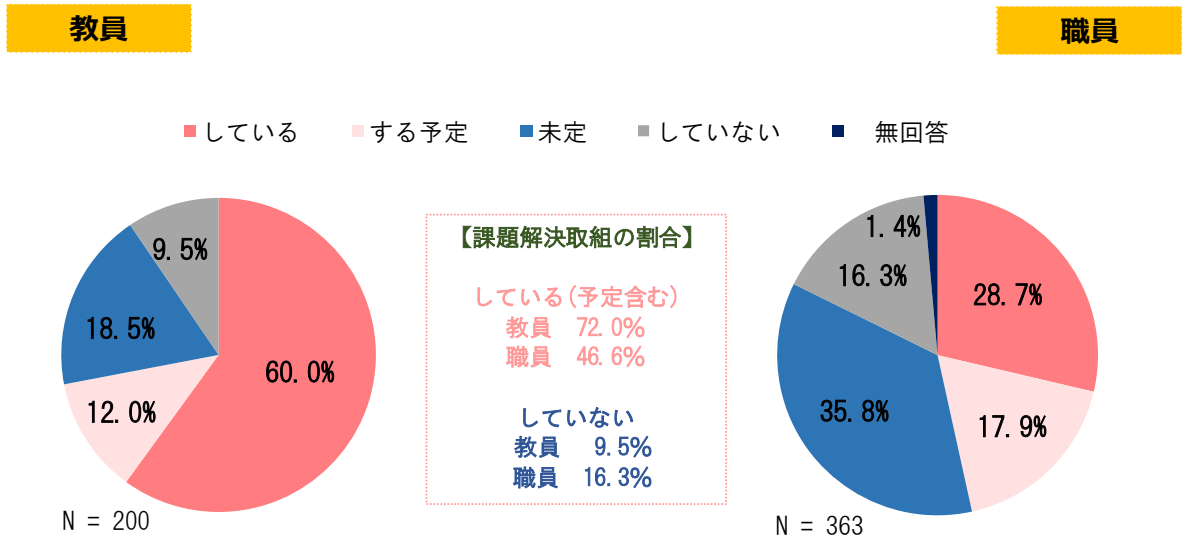


図14　SDGs の課題解決の取組

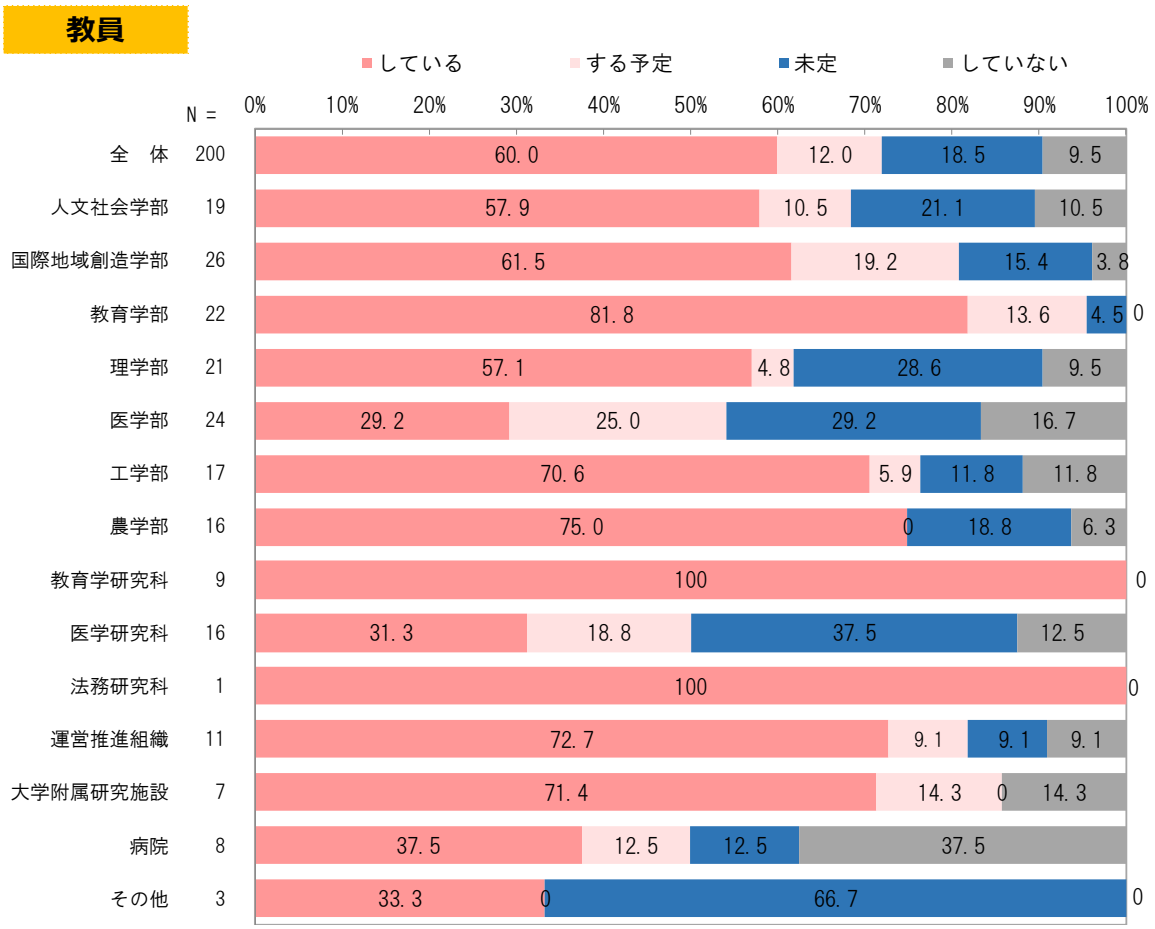


図15　教員・所属別　SDGs の課題解決の取組

職員

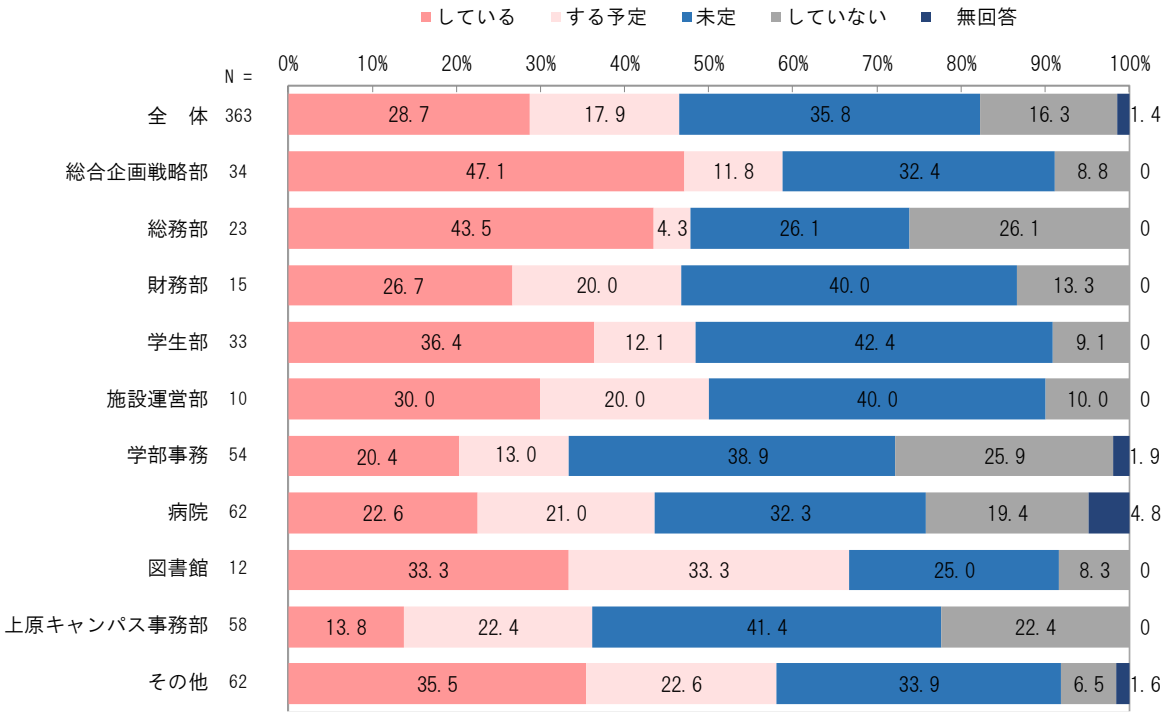


図16　　職員・所属別　SDGs の課題解決の取組

●設問：SDGs に合わせた自身の取組との関連付けについて

自身の取組との関連付けについては、教員で「している」が 59.5%、職員が 32.5%となっており、「していない」は、職員が 16.5%と教員の 8.0%より高く、職員各々の業務との関連付けができていないことが想定されます。

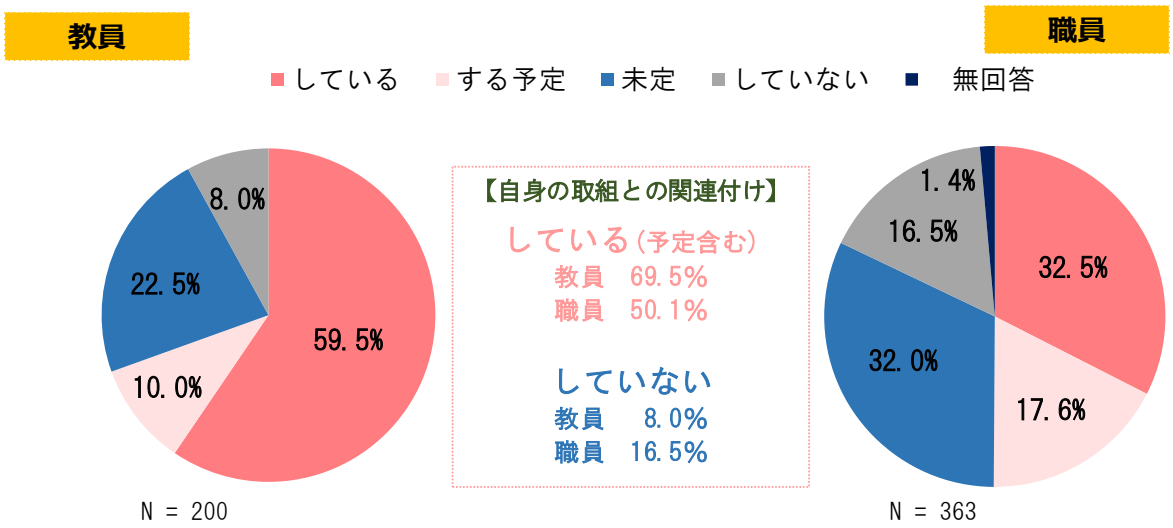


図17　　SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

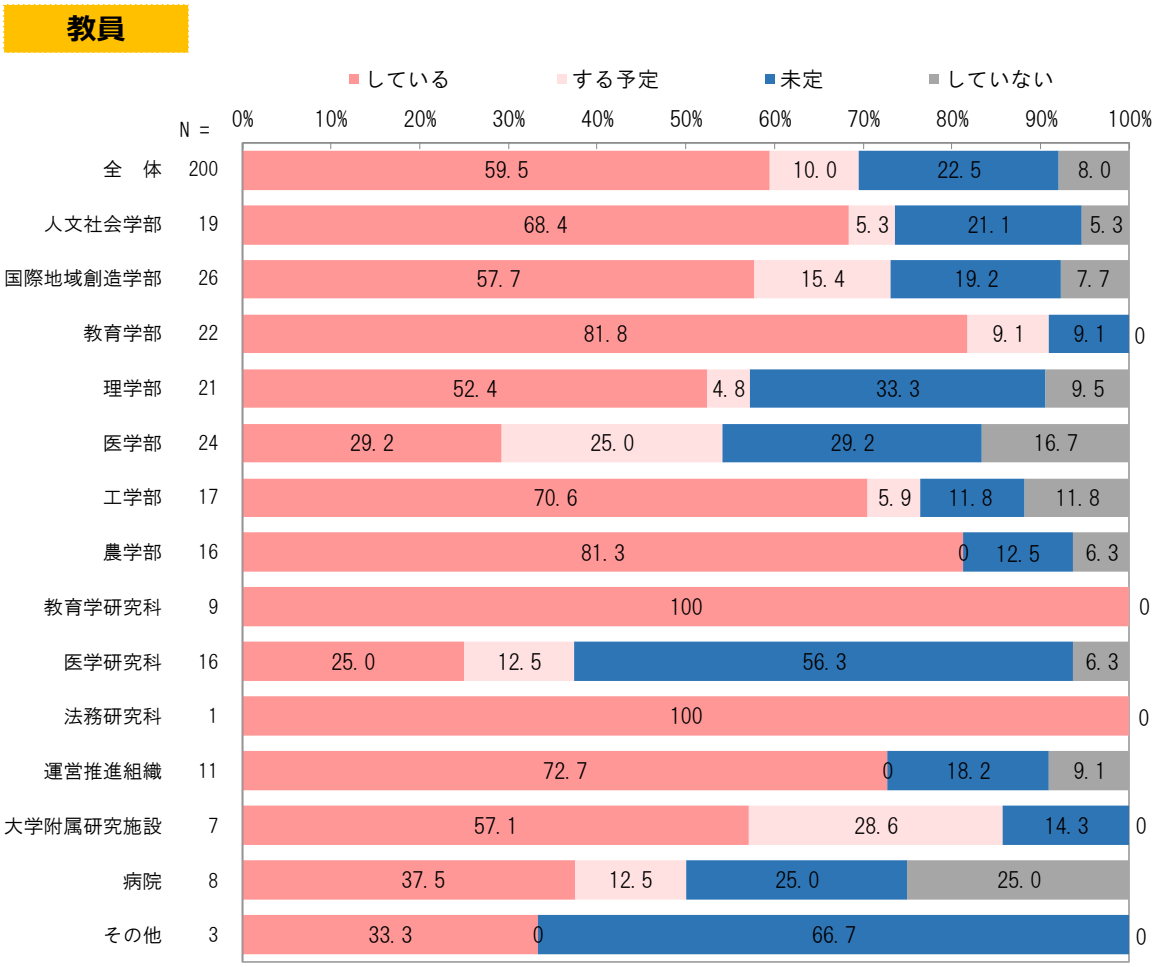


図18　教員・所属別　SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

職員

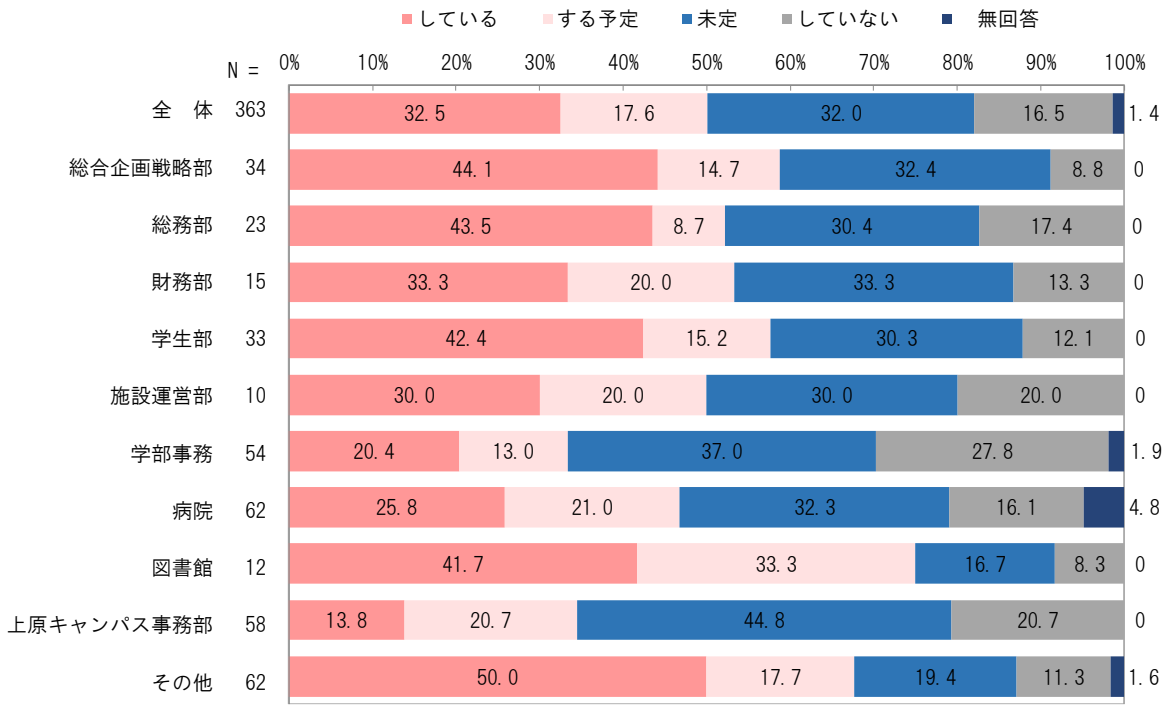


図19　職員・所属別　SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

●設問：同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

同僚、家族や友人などと SDGs について意見を交わすことについて、教員は「している」が 50.0%、職員は 27.3%となっています。一方、職員の「していない」が 39.9%と高くなっています。

教員と職員では業務や役割が異なるため、SDGs への関心の度合い（深さ）が異なることが想定されます。

教職員の会議等で使用する資料をデジタル・データで配布・閲覧する、大学内全体で水や電気を大切にする等、業務に関連した SDGs 達成に向けた課題解決への取組を大学全体で導入することや、シンポジウムや研修等を通じて SDGs に関する意識啓発を図るような職場環境の整備が重要だと思われます。

教員　　**職員**

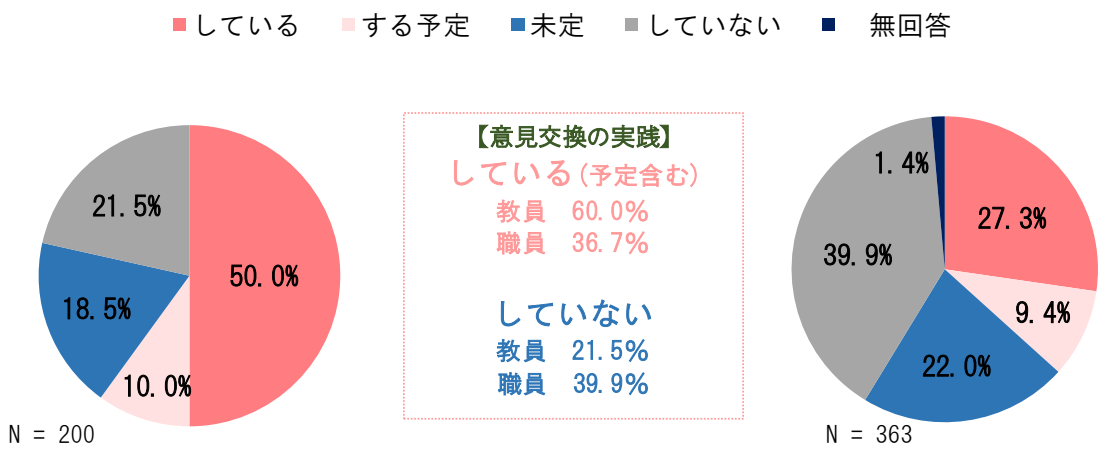


図20　同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

重点的に取組むべき目標

教員・職員

「④質の高い教育をみんなに」「③すべての人に健康と福祉を」が上位

●設問：SDGs の 17 の目標で特に重要であると思う目標（複数回答）

割合が高い順に「④質の高い教育をみんなに」、「③すべての人に健康と福祉を」、「①貧困をなくそう」、「⑯平和と公正をすべての人に」が教職員ともに上位を占めています。教員の特長は「⑨産業と技術革新の基盤をつくろう」、「⑮陸の豊かさも守ろう」について割合が高く、職員は教員と比較し、「⑧働きがいも経済成長も」、「⑥安全な水とトイレを世界中に」の割合が高くなっています。

教職員で重要である目標が異なる部分もあることから、各役割に応じた取組事例などの PR を兼ねた教職員の周知、学外の多様なステークホルダーとの連携などの紹介を通して、SDGs の理解度や実践度を高めることは重要であると思われます。

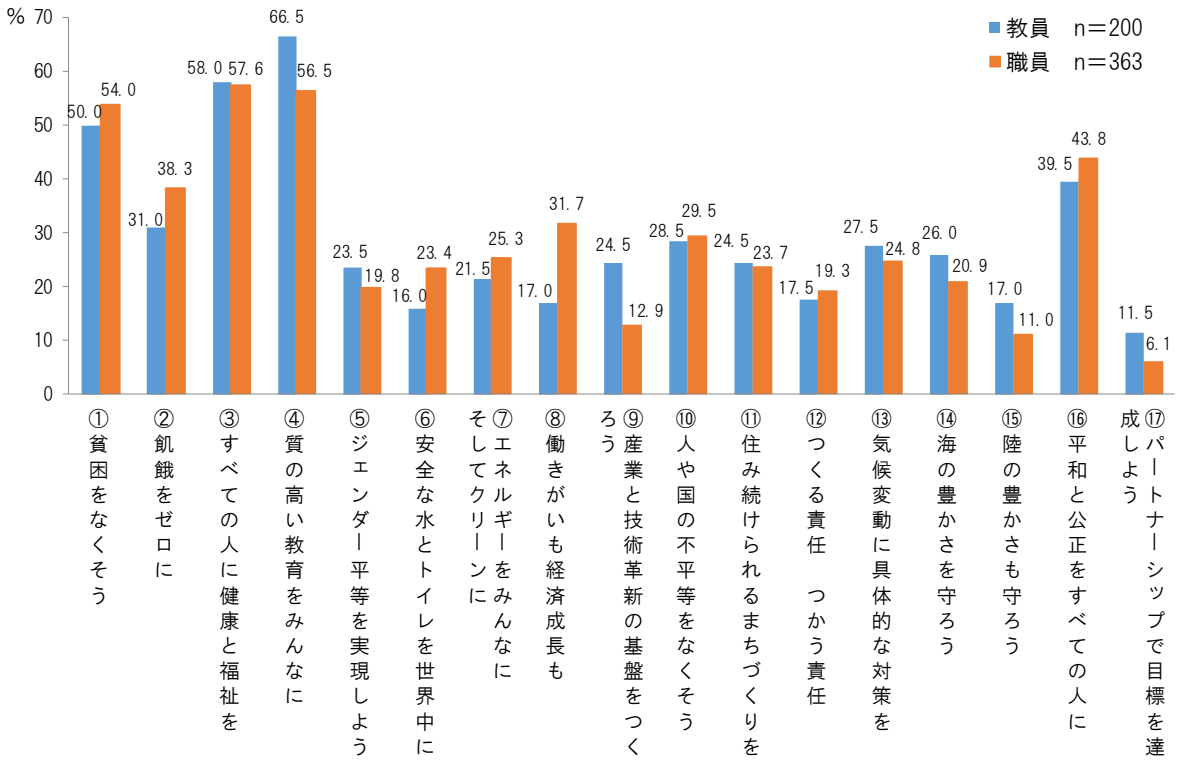


図21　　SDGs の 17 の目標で特に重要であると思う目標

●設問：SDGs の 17 の目標で内容について深く調べてみたい目標（複数回答）

教員については、「④質の高い教育をみんなに」、「③すべての人に健康と福祉を」が職員より関心が高く、職員については、「⑧働きがいも経済成長も」、「⑬気候変動に具体的な対策を」が教員と比較して関心が高くなっています。

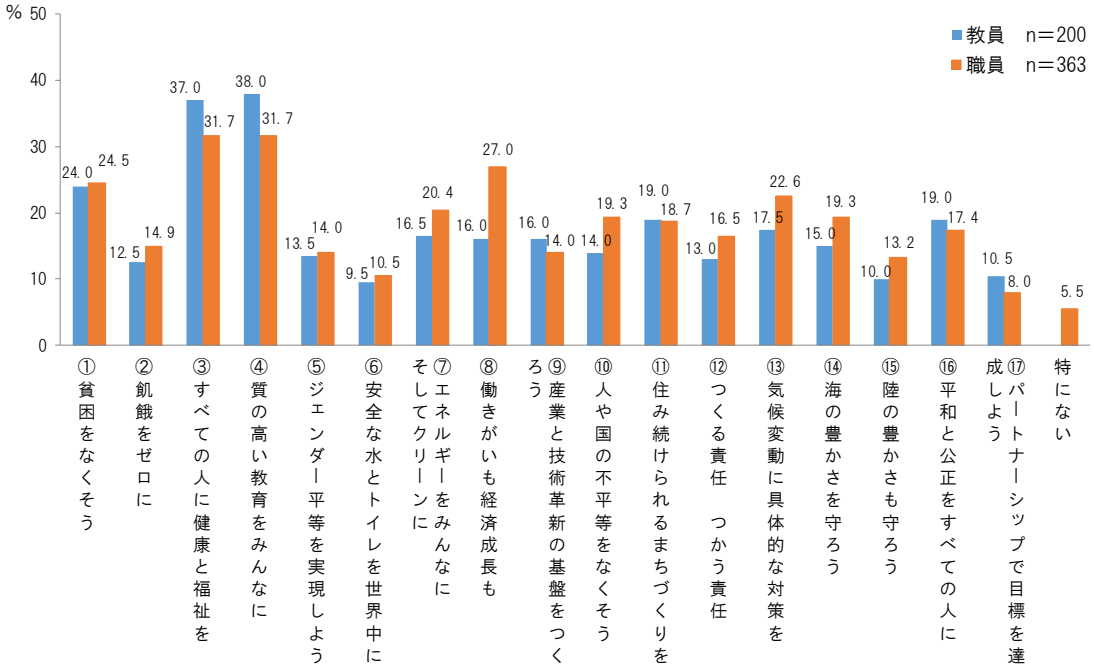


図22　SDGs の 17 の目標で内容について深く調べてみたい目標

●設問：SDGs の 17 の目標で琉球大学が特に取り組むべきだと思う目標（複数回答）

教員・職員ともに、「④質の高い教育をみんなに」が最も高い割合になっています。

教員については、「④質の高い教育をみんなに」に次いで「③すべての人に健康と福祉を」が 50.0%、「⑭海の豊かさを守ろう」が 49.0%と続きます。

職員については、「④質の高い教育をみんなに」に次いで「⑧働きがいも経済成長も」、「⑨産業と技術革新の基盤をつくろう」が 40.2%、「⑭海の豊かさを守ろう」が 38.3%となっています。

「①貧困をなくそう」は教員が 37.0%に対して職員は 15.2%と 21.8 ポイントの開きがあり、教員と職員で認識が異なっています。

一方、亜熱帯の島嶼に位置する本学の特長となる「⑭海の豊かさを守ろう」は教職員ともに 4～5 割、「⑬気候変動に具体的な対策を」、「⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに」が教職員ともに 3 割程の割合です。

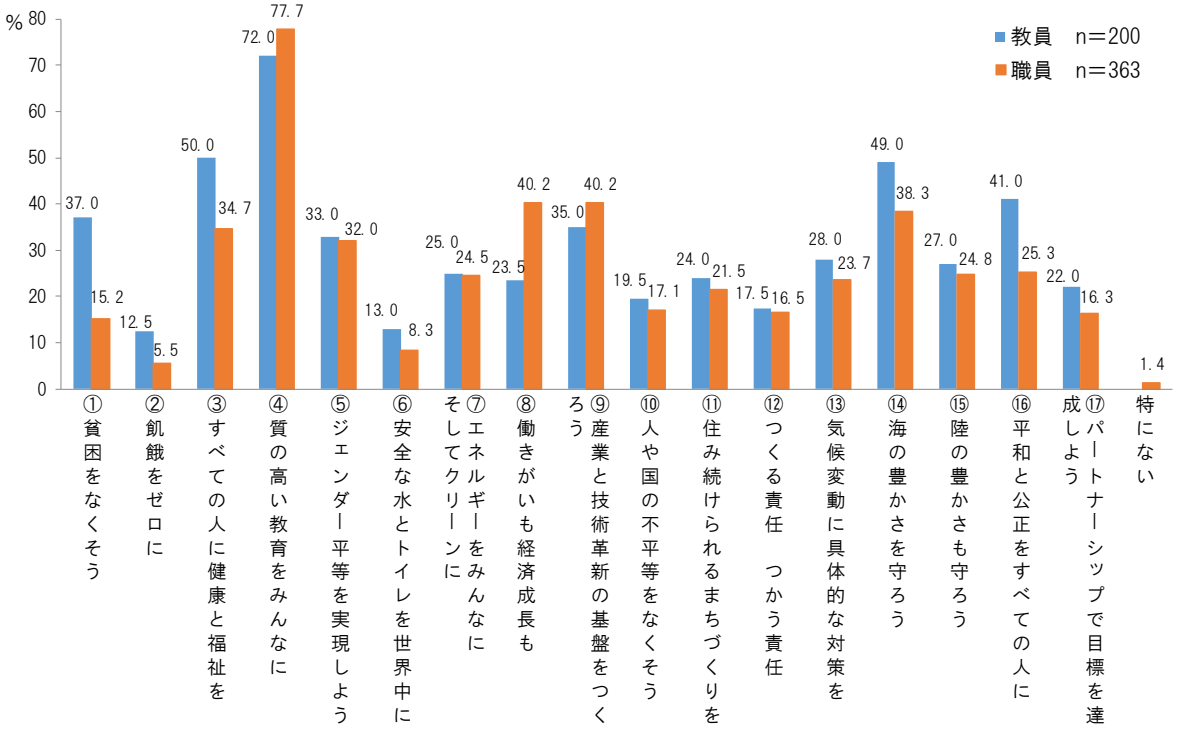


図23　SDGs の 17 の目標で琉球大学が特に取り組むべきだと思う目標

●設問：琉球大学 SDGs 推進室が重点的に取り組むべきだと考える項目（複数回答）

「子どもの貧困問題への対応」が教員・職員ともに 47.0%・38.0%で上位となりました。

教員では「SDGs の達成に貢献する教育実践に向けたセミナー等の実施」が 32.5%、次いで「ICT を活用した離島教育環境改善事業」が 30.5%です。一方、職員では、「SDGs 教育カリキュラムの構築」が教員よりも 11.9 ポイント高く、現場で使える実践的な知識が必要とされていることが分かります。

SDGs 達成に貢献する研究プロジェクトの推進を加速化するため、多様なステークホルダーと連携・協働していく広報活動、カリキュラムの構築など現場からの声を形にしていくことが求められます。

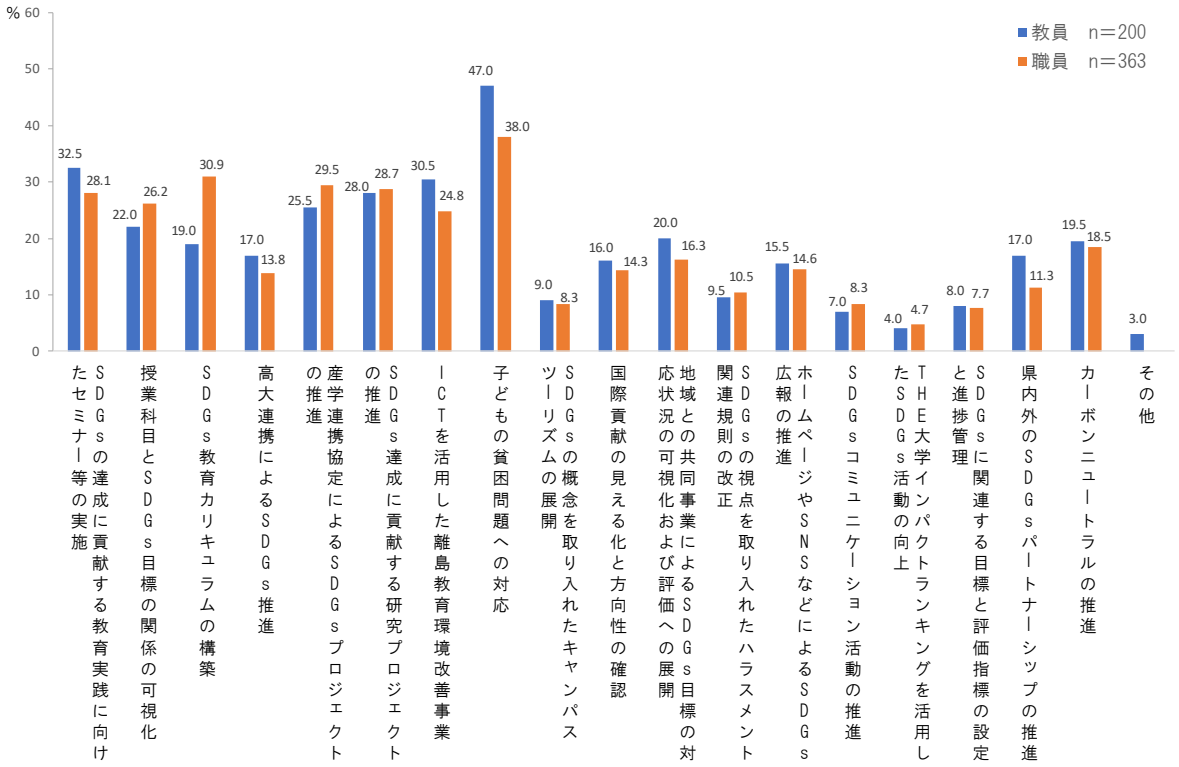


図24　琉球大学 SDGs 推進室が重点的に取り組むべきだと考える項目

教員の SDGs との関わり

教員

SDGs に関連する科目提供への関心は 8 割と多い

●設問：SDGs に関連する科目の提供

「関心がある」教員（大変関心がある（22.0%）＋まあまあ関心がある（59.5%））は、81.5%が科目提供に関心があります。

所属別では、医学研究科の「関心がない」教員（あまり関心がない（31.3%）＋全く関心がない（12.5%））は、43.8%と関心度が低い傾向があります。

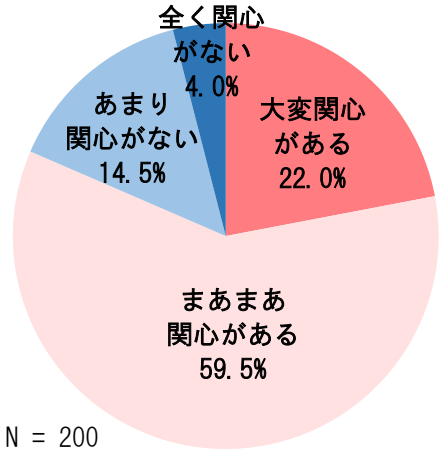


図25　SDGs に関連する科目提供への関心度

	n	SDGsに関連する科目の提供への関心（%）			
		大変関心がある	まあまあ関心がある	あまり関心がない	全く関心がない
全　体	200	22.0	59.5	14.5	4.0
人文社会学部	19	15.8	63.2	15.8	5.3
国際地域創造学部	26	7.7	73.1	15.4	3.8
教育学部	22	36.4	59.1	4.5	-
理学部	21	23.8	47.6	19.0	9.5
医学部	24	20.8	58.3	20.8	-
工学部	17	29.4	58.8	5.9	5.9
農学部	16	18.8	68.8	12.5	-
教育学研究科	9	33.3	66.7	-	-
医学研究科	16	-	56.3	31.3	12.5
法務研究科	1	100.0	-	-	-
運営推進組織	11	54.5	45.5	-	-
大学附属研究施設	7	28.6	57.1	14.3	-
病院	8	12.5	62.5	25.0	-
その他	3	-	33.3	33.3	33.3

表1　所属別 SDGs に関連する科目提供への関心度

SDGs に関係している研究テーマは「環境・エネルギー・GX」が多い

●設問：SDGs に関係している研究テーマ

研究テーマを 5 つの分類に分けて集計したところ「環境・エネルギー・GX（グリーントランスフォーメーション）」が 27.6%、「教育・学習」が 22.4%、「健康・Well-being・QOL」が 21.1%の順になりました。

また、5 つの分類について、教員のテーマ別回答で多かった研究テーマは次のような内容でした。

①環境・エネルギー・GX 等では、温室ガス削減、脱炭素、環境汚染物質、食品ロス・廃棄物の有効利用などの研究、②教育・学習では、言語教育、音楽教育、コミュニティスクールなどの研究、③健康・Well-being・QOL では、医療に関する研究テーマが多く、皮膚腫瘍の病態解明、AI による医療診断支援などの研究、④ダイバーシティ・インクルージョンでは、貧困とジェンダー、障がい者の雇用促進、日本語を母語としない児童生徒の日本語支援、ジェンダー・ギャップ解消の取組みなどの研究、⑤生物多様性では、サンゴ礁生態系の研究、持続可能な農業などの研究でした。

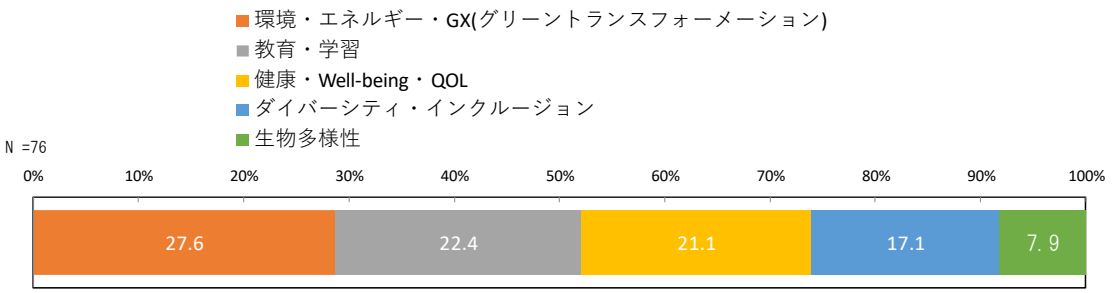


図26　SDGs に関係している研究テーマ

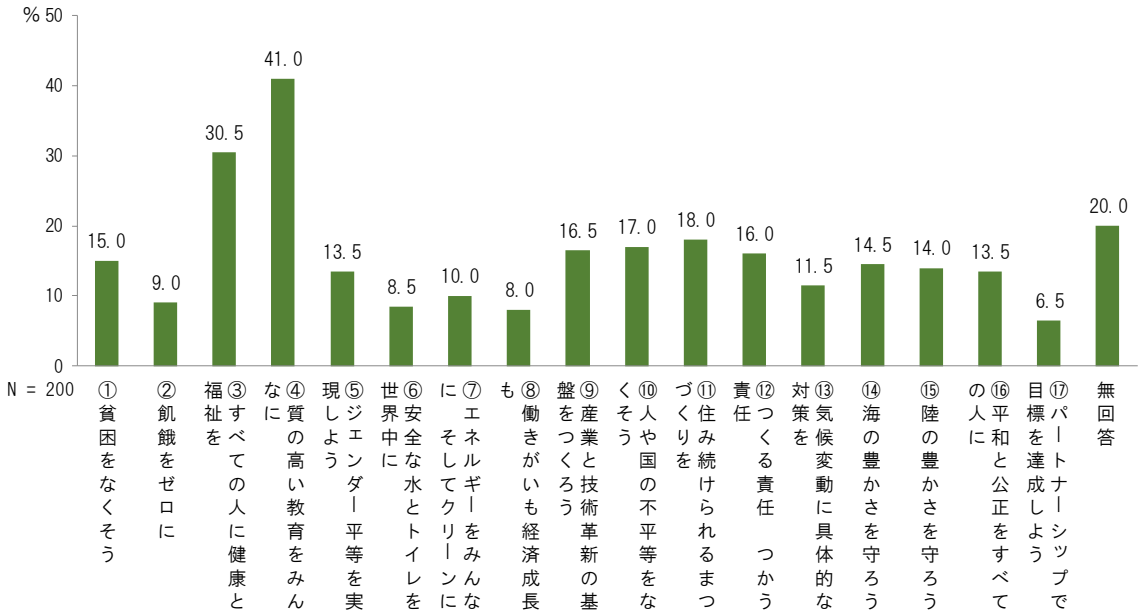


図27　研究テーマが関連している SDGs ゴール（複数回答）

●設問：産学官連携での共同・受託研究

「あなたは産学官連携で共同・受託研究がありますか。」という設問に対して、「はい」との回答は 21.5%、「いいえ」は 78.5%で、「いいえ」が高い結果となりました。「はい」と回答した 43 件をみると、「環境・エネルギー・GX（グリーントランスフォーメーション）」が 34.4%と高く、「健康・Well-being・QOL」が 28.1%と続きます。

研究テーマが関連している SDGs ゴールとしては、「⑨産業と技術革新の基盤をつくろう」が 8.5%、次いで「③すべての人に健康と福祉を」が 8.0%と続きます。一方、「無回答」が 78.5%と割合が高くなっています。

教員のテーマ別回答では、医療関連、エネルギー資源関連、農水関連の持続可能な取組、途上国での技術支援、子どもの居場所、妊産婦の支援などがあります。

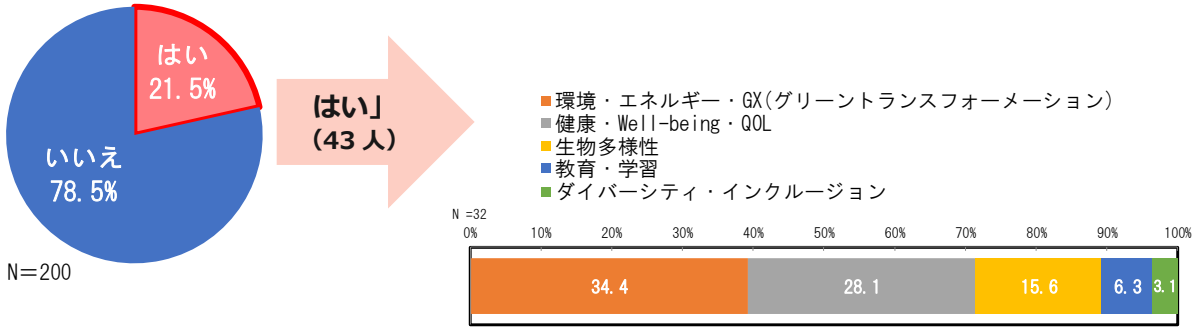


図28　SDGs に関連する産学官連携での共同・受託研究

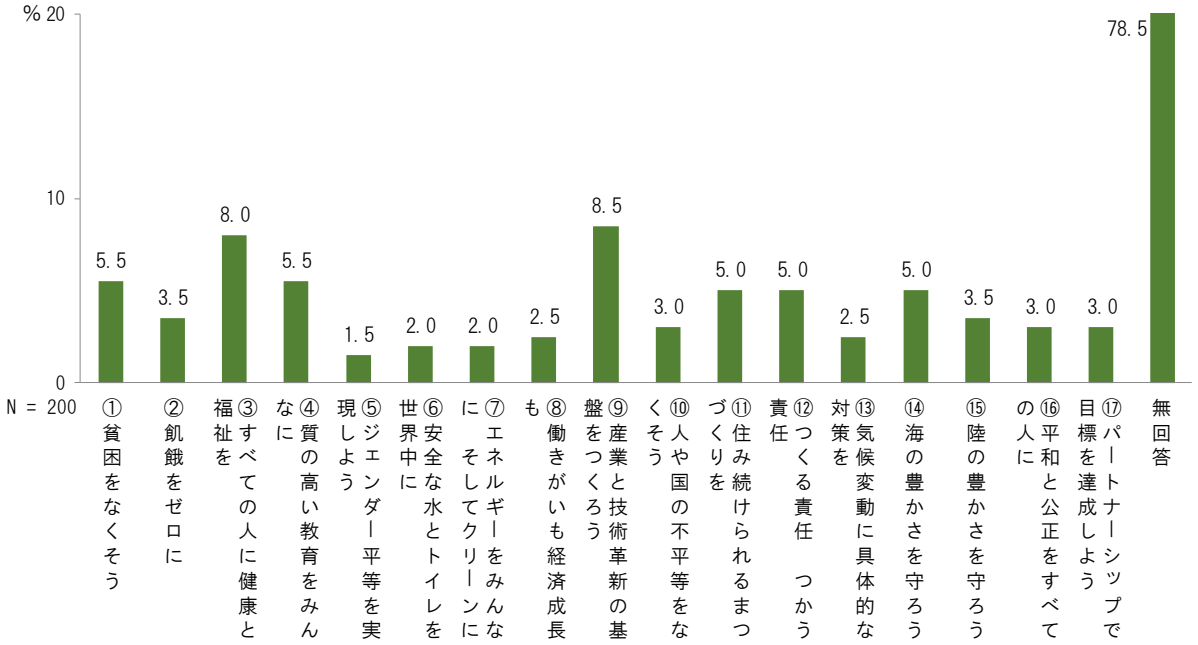


図29　共同・受託研究テーマが関連している SDGs ゴール

●設問：研究者データベースの SDGs アイコン設定の意向

研究者データベースの SDGs アイコン設定については、「反映させてもよい」が 41.5%、「既に反映しているのでそのままでよい」が 22.5%となっており、アイコン設定に前向きな傾向がみられます。

「どちらとも言えない」の 26.5%の教員への理由等を聞き取り、SDGs が社会に浸透している現状から、多様なステークホルダーとの連携等の推進において設定率の向上策を考えていく必要があります。

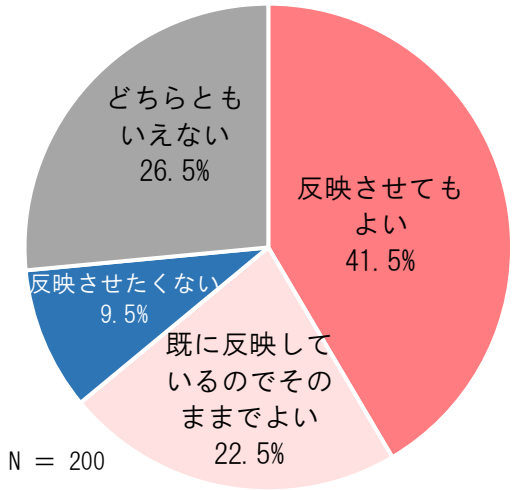


図30　研究者データベースへの SDGs アイコン設定の意向

●設問：SDGs 達成に貢献する研究テーマへの支援制度の利用の意向

支援制度の利用の意向については、「利用したい」が 36.5%であるが、「どちらとも言えない」が 55.5%を占めています。

支援制度の内容や活用方法やメリットについて、丁寧に説明することで、利用したいと思う研究者が多くなると思われます。

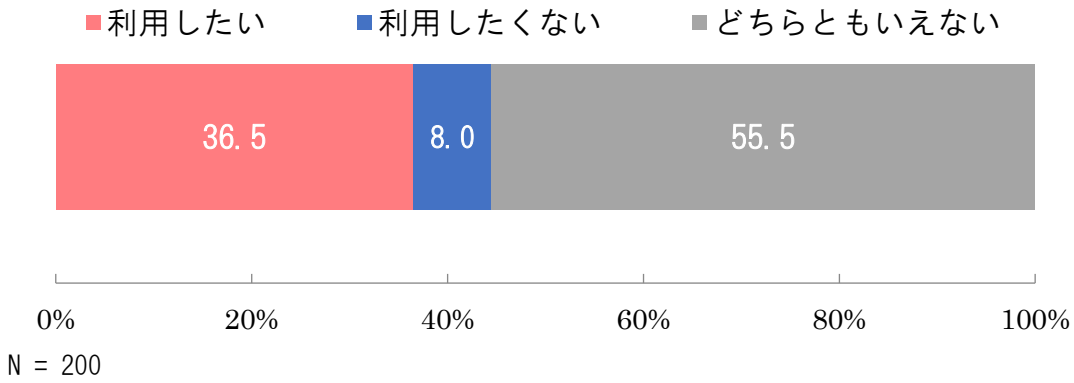


図31　SDGs 達成に貢献する研究テーマへの支援制度の利用の意向

今後の SDGs の取組に関する意見

教員・職員

●アンケートの最後に、本学の SDGs に関する今後の取組についてご意見を頂きました。
忌憚のない意見を頂きましたが、全てを掲載することは紙面の制約につき、抜粋して紹介します。

教員

●SDGS に関する主な意見

・基礎研究にしっかり予算をつけてほしい。SDGs は目的ではなく、個々の基礎研究の結果が、それにつながると思う。
・SDGs に批判的な視点も学生に対しては提供してほしい。
・教育・研究・社会貢献をバランスよく行っていければよい。
・大きなプロジェクト支援も大事だと思うが、少額の研究支援も多く行うと、SDGs を意識した研究も盛んになると思う。
・性的マイノリティについての琉球大学の指針の作成、ダイバーシティ推進のための宣言の中に「性的マイノリティ」という文言を入れることについて、実現しておりません。「誰一人取り残さない」という SDGs の目標達成のためにも大学に積極的な取り組みをしてほしい。
・SDGs のテーマのうち、社会全体で取り組みやすいものと取り組みにくいものがあると感じる。特に取り組みにくいテーマ（貧困、平和、やジェンダーに関するテーマ）について、大学主導で積極的に実施していく必要があると思う。
・SDGs は大別すると貧困・ジェンダー・環境対策だと思っており、その三本柱で大学ができる限り取り組んでいけば良い。
・子どもの貧困問題を解決するための研究・教育ポストを設けると効果的であると考える。
・SDGs の達成に向けて各教員が行っていることが、県民、特に、地域住民にわかりやすく見える（可視化）ような取組も考えてもらえたら良い。
・SDGs に関する研究を推進して欲しいが、個々の教員への負担を最小限にすることを最優先に進めて欲しい。既に研究以外の業務が多く、研究時間の捻出に日々苦労している。例えば報告書記載内容の簡素化、事務手続きの代行など。
・セミナーやシンポジウム等を土日開催とするなど、平日の業務時間帯と重ならないようにしてもらいたい。
・定員削減による現教員の負荷が大きくなっていると感じる。それらを解消し教員の活動できる幅を持たせてほしい。
・琉球大学が独自に再生可能エネルギーを導入し、2030 年度までに現在の CO2 排出量の半分に、2050 年までにゼロにすることを目指すべきである。
・大学の電力を 100%再エネにしてほしいです。
・キャンパスの美化活動を促進して頂きたい。
・沖縄 JICA と協力して国際連携と SDGs をもっと増やしていいと思う。
・SDGs の取組を通じて、産学官連携による教育・研究の展開などが活発化し、地域、企業、行政などとの有機的な繋がりが更に強化されると良いと思う。
・沖縄の歴史的、地理的な特殊性を踏まえ、また、齋藤幸平の『人新世の「資本論」』などでの批判を踏まえた上で、SDGs として何ができるかについて、全学で知恵を集めてはどうか。
・地域課題を解決するための共同研究や地域貢献の事業に関しての具体的な取り組みを構築する際に当該地域を拠点に活動している「産」の参入のハードルが高いように感じる。「産」に有利になるようなしくみづくりもこれから必要かと思う（この点では結構「官」が頑張っているとは思う）。

教員

●主な要望

・SDGs の具体例として取り上げられているものだけではなく、何が SDGs かを合意形成していくためのイベント等のアクションを進めていくことが必要かと思う。
・亜熱帯、熱帯地域における研究・教育のセンターとしての具体的な取り組みを図るため、国際共同研究や学生の受け入れを通して、SDGs 関連教育を推進する必要がある。
・環境への配慮やエネルギー、気候変動ももちろん重要であるが、私たちが日々生活している中で人権が侵害
されるような状況があってはならない。そのためにも一刻も早く「性的マイノリティに関する基本方針」を策定し、
職員に性的マイノリティに関する研修を実施すべきである。
・既存の取り組みで SDGs に貢献している研究や取り組みを SDGs 推進室が調査し、支援通知等があれば
助かる。
・SDGs に関する研究を進めることは良いが、「SDGs に関係する研究を特別に優遇すること」および「SDGs に(直接)関係しない研究を冷遇すること」は絶対に反対である。
・教職員に対して推進室が SDGs とは何かということが分かるようなセミナーをもっと提供するべきだと思う。例えば福岡県のように組織として SDGs にどう取り組むかというのを明確にしてほしいと思う。
・本学独自の SDGs 研究を推進する研究者への助成金事業の創設の提案（年間総額 100 万円あたりで 3 件程度で評価が向上すれば金額を増やす等）。
・SDGs は日本では積極的に取り組んでいるが、諸外国はそこまで関心を持っていない。そのため、近いうちに廃れると思うため、あまり取り組む必要性を感じない。

職員

●SDGS に関する主な意見

・SDGs は、社会や企業だけでなく、様々な業種でも SDGs に関する理解や知識が必要となっているので、学生に SDGs に関する知識をつけたり、意識づけや行動につながる教育や学習の機会を提供したほうがいい。
・教育は貧困、健康、経済、意識づけの根幹の基盤となるものと考えている。その根幹である琉球大学は沖縄県の代表として国内ならず世界に活動や理念を発信できる存在になってほしい。職員の一人一人が SDGs への意識づけが必要であると考える。
・幅広い取り組みは教職員の負担を大きくするため、大学として得意分野に特化した SDGs の取り組みを行うべきと考える。
・世界的にみてとても大切な取り組みだと思いますが、そのせいで仕事が増えたり、負担となっては意味がないと思います。セミナーやシンポジウム等を土日開催とするなど、平日の業務時間帯と重ならないようにしてもらいたい。
・教育機関として、次世代の育成が重要と考える。授業（小、中含め）の一環でもよい、職員の研修でもよいと思うが、学内（校内）至る所に 17 の目標のロゴを貼ることで意識が高まるのではないか。
・職員の働き方を見直す。
・ゴミ箱削減。ごみを減らす、持ち帰る。
・ゴミを減らすことを心掛ける。食品用のトレーをリサイクルに出すことによってゴミの量を大幅に減らすことが出来る。
・各地域で様々な取り組みがされているが、個々バラバラで行っているように思う。行っている事は大事な事でもあるが、その取り組みが一緒に出来ればもっと大きな価値を生み出すことにもなるような気がする。可視化されていけば賛同者も増えていく。
・講演会やシンポジウムも大切だとは思いますが、エコツーリズムなど、参加者が意識を持って行動できるような（なるべく体験のものがよいと思います）プログラムがあれば、より目標を実感できると思う。
・大学として取り組む SDGs 目標を明確化し、教職員に周知し、セミナー等で理解を促し、小さいアクションを大学全体で行っていくこと。

職員

●主な要望

・社会問題とも合わせて SDGs を取り込むことが必要である。一方では取り組んでいるが、一方では取り組んでいない、という状態を作らない。
・琉球大学において SDGs に取り組むことは大変よいことだと思います。どのような取り組みをしているかを積極的に外部に発信したほうがよいと思う。
・本学公式ウェブサイトで、そのニュースに関連する SDGs 目標のアイコンを共に配置しているのは視覚的にも目を引き良い。
・取組についての効果確認等のフォローアップ、費用対効果の視点からの評価等も期待する。
・大学として 17 の目標のうちどの項目を推し進めたいのか。また、推し進めた項目に対する評価の検証があまり見えない。SDGs のシンポジウムをオンラインで行った方が効果的と考える。

取組事例　－教育 WG の取組－

広く、深く SDGs について学ぼう　－SDGs 関連科目－

琉球大学は、建学の精神である自由平等・寛容平和を継承・発展させた 3 つの基本理念、すなわち「真理の探究」「地域・国際社会への貢献」「平和・共生の追求」のもと、「地域と共に豊かな未来社会をデザインする大学」を目指しています。

それぞれの学部・大学院の授業は、学士教育プログラムおよび大学院教育プログラムのディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに基づき提供されるものですが、授業の中で広く、深く SDGs について学ぶことができる科目もあります。

そこで、授業で取り扱う内容に、17 の持続可能な開発目標について、

❶ 持続可能な開発目標について学ぶ内容
❷ 持続可能な開発目標を達成するために必要な知識やスキルについて学ぶ内容
❸ 持続可能な開発目標を達成するために取り組む動機付けとなる内容

のいずれかを含む場合、関連する 17 の持続可能な開発目標を示して「SDGs 関連科目」として取り扱うこととしています。

琉球大学で SDGs について学びたい人は、「SDGs 関連科目」を参考に各教育プログラムの枠を超えて SDGs について幅広く学ぶことができます。

SDGs 関連科目はこちらから

SDGs を学際的･体系的に学ぼう　－副専攻の開設－

琉球大学は、学部及び学科等で編成する教育課程以外に、学生の「複眼的な思考力」「総合的な理解力」を育成するための教育課程として副専攻を開設しています。

現在、5 つの副専攻を開設していますが、特に SDGs に関する学びを深めることが出来る「総合環境科学副専攻」「グローバル津梁プログラム副専攻」を紹介します。

- **総合環境学副専攻**
  - ☑ 環境についての知（環境リテラシー）を修得します。
  - ☑ 「環境」をテーマにした科目を学際的科目群として、学部横断的学びを基礎とし、「総合環境学」として理論と実践を多面的に学びます。
  - ☑ 文系・理系を問わず、本学の多くの分野の教員から人間環境、自然環境、社会環境、地球環境をめぐる諸問題について学びます。
- **グローバル津梁プログラム副専攻**
  - ☑ 語学系科目や留学生との多彩な協働実践を通し、グローバル時代を牽引するリーダーシップ能力及びスキルを修得します。
  - ☑ 自分の専門を超えて複合的な問題を統合、解決する「統合型リーダー」と、特定の課題に対する課題解決を目指す「特定課題型リーダー」を育成します。

取組事例　－研究 WG の取組－

SDGs 達成を目指す研究活動の支援

SDGs の達成には大学の広範な貢献が必要とされていますが、中でも SDGs に関する研究は、大学が担う SDGs への貢献の大きな一つの柱とされています。SDGs 推進室研究 WG では、令和 2 年度より SDGs の課題解決を目指す研究を支援するため、研究戦略的研究推進経費事業「琉球大学 SDGs 社会課題解決研究プロジェクト」を学内公募しています。令和 5 年度は、応募件数 30 件の中から、表 2 に挙げる 8 件の課題を採択・支援しました。応募数は年々増加しており、SDGs 達成を目指す活動の増加を示しています。

表2 「琉球大学 SDGs 社会課題解決研究プロジェクト」採択・支援事業

SDGs 達成を目指す活動の発信と共有

部局	研究課題	関連するゴール
教育学研究科	「共生社会の実現」に向けた「貧困や障害等の影響を受ける多様な子ども」への支援体制の構築と支援・教育実践アプローチ	1・4・10
工学部	住み続けられる島：モビリティ新技術の観点から	3・9・11
工学部	カーボンニュートラル促進を目的とした先進的畜産農業	7・9・13
人文社会学部	障害者就労支援飲食店応援アプリケーション「DERIA」の開発と社会実装	8・10
理学部	サンゴ礁におけるマイクロプラスチックの動態と造礁サンゴへの影響	14
医学部	航空機騒音に関わる健康課題への取り組み	3・4・11
工学部	廃コンクリート粉末とバガス灰を用いたセラミックスの作製	1・2
国際地域創造学部	女性活躍に関する分野横断研究	5・8・10

表 2「琉球大学 SDGs 社会課題解決研究プロジェクト」採択・支援事業

SDGs 推進室研究 WG では、毎年「琉大 SDGs 研究シンポジウム」を開催し、SDGs のゴール達成を目指す研究や取り組みを学内外へ広く発信しています。さらに、学内の SDGs 研究の推進とシーズの発掘、そして学内ネットワークの構築を目的に、SDGs ランチセミナーをオンラインで開催しています。ランチセミナーでは、SDGs の課題解決に向けた取り組みを行っている方に話題提供頂き、部局や職種を超えて、発表者と参加者でざっくばらんに質問や意見交換が行われています。今年度は初めて学生の方にも話題提供して頂きました。SDGs 推進室研究 WG では、これらの活動を通して、既存の活動の発展と新たに取り組む構成員の増加を目指しています。

取組事例　－社会貢献 WG の取組－

子どもの貧困問題への対応

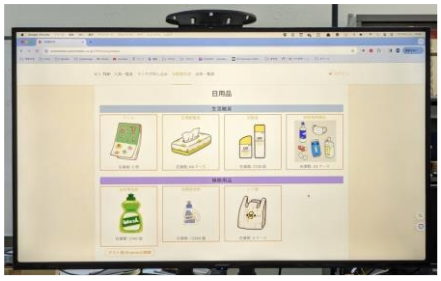
沖縄県は全国と比較して「子どもの貧困」に関連する課題が多く、その解決に向けて、琉球大学に所属する教職員や学生がチームとなり取り組んでいます。そのひとつに、若年シングルマザーを支援するシェルター（おにわ）を開設し、支援が特に必要な出産前後の時期の医療的・身体的・心理的なケアを専門スタッフが連携して提供する事業があります。令和 5 年 10 月からは沖縄県事業として再スタートすることとなり、琉球大学も引き続き協力をしていきます。

また、沖縄県内の各種支援団体との情報交換を定期的に実施しており、沖縄県事業として関連シンポジウムも実施しています。

○子どもの居場所とサポーター企業をつなぐ AI マッチングアプリの開発

寄付された食料品を子どもの居場所に配る活動の効率化を目指して、教員（工学部・宮田龍太助教）と学生がチームとなり、人工知能（AI）を活用したアプリの開発に取り組んでいます。令和 5 年度は寄付の適正配分を計算する AI アプリ“うむゆい”で扱える寄付物品を 5 品目から 40 品目に拡張する開発を行いました。さらに、令和 6 年 1 月末に開発した AI アプリを使った実証実験について、那覇市を中心に実施しています。

“うむゆい”開発メンバー（宮田助教：前列右）



AI アプリ“うむゆい”の画面

取組事例　－業務・ガバナンス WG の取組－

THE 大学インパクトランキング 2023 へのエントリー

イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education（THE）」が実施し、SDGs の枠組みを使って大学の社会貢献度を測る「THE 大学インパクトランキング 2023」に琉球大学にとって強みとなる（したい）11 項目にエントリーしました。

エントリーの結果、総合ランキングの対象となった世界 1,591 大学中で 301-400 位、国内 17 位タイにランクインしました。SDGs 目標別ランキングにおいては以下のとおりランクインし，高い評価を得ました。

琉球大学は、これからも SDGs の達成に貢献する活動に取り組み、様々なパートナーと積極的に連携し、持続可能な社会の実現に向けて行動します。

SDGs カテゴリ	SDG14 海の豊かさを守ろう	SDG12 つくる責任 つかう責任	SDG15 陸の豊かさも守ろう	総合
世界ランク	29 位/504 校	101-200 位 /674 校	101-200 位 /586 校	301-400 位 /1591 校
国内ランク	3 位 /40 校	6 位タイ /45 校	11 位タイ /42 校	17 位タイ /78 校

表3　「THE 大学インパクトランキング 2023」における本学の主要スコア

オープンキャンパスにおける SDGs コンテンツの出展

SDGs 推進室各 WG 及びカーボンニュートラル推進チームの取組内容を紹介する動画を制作し、SDGs 推進室ウェブサイトで配信すると共に、オープンキャンパス当日は、附属図書館ラーニング・コモンズにて、参加者に視聴していただきました。

【琉球大学 SDGs 取組紹介動画 2023】
https://sdgs.skr.u-ryukyu.ac.jp/r5opencampus-movie/

取組事例　－カーボンニュートラル推進チームの取組－

カーボンニュートラル実施計画の策定

国が掲げる 2050 年カーボンニュートラル実現に向け、本学の脱炭素化を推進するため、カーボンニュートラル実施計画を策定しました。

本計画に盛り込まれた取組を着実に実施することにより、本学の事務及び事業に伴い直接的又は間接的に排出される温室効果ガスの総排出量について 2050 年カーボンニュートラル実現に向け削減目標及び達成時期を以下のとおり定めています。

中期目標：2030 年までに 2013 年度比 30%以上の削減を目指す
長期目標：2050 年カーボンニュートラルの実現を目指す

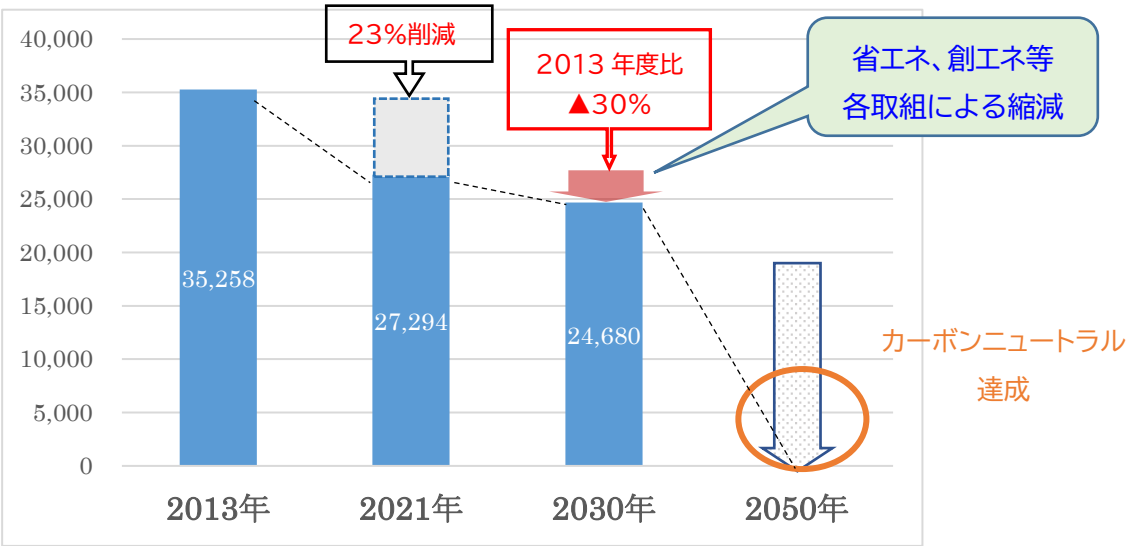


図32　温室効果ガスの総排出量に関する削減目標

カーボンニュートラルに関するワークショップの開催

SDGs 推進室　業務・ガバナンス WG と連携し、令和 5 年 9 月 11 日に「琉大教職員のための SDGs ワークショップ」を開催しました。

SDGsに関する教職員・学生アンケート調査報告書及びTHE大学インパクトランキング2023の結果説明の他、カーボンニュートラルに関する取組を紹介後、参加者によるグループディスカッションを行いました。（参加者数：40 名）

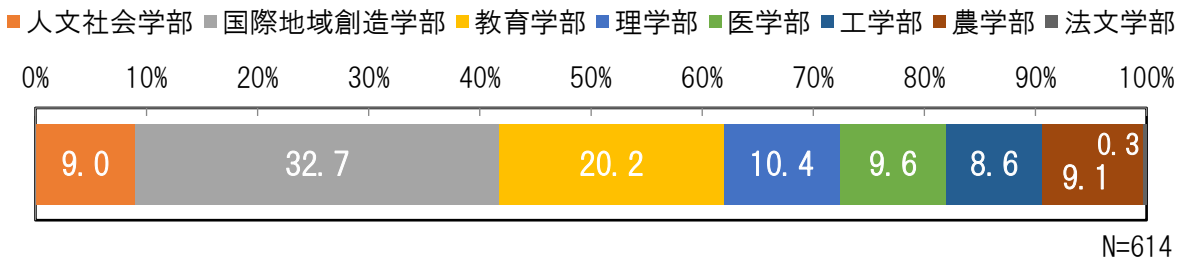
回答者の基本属性

学部学生

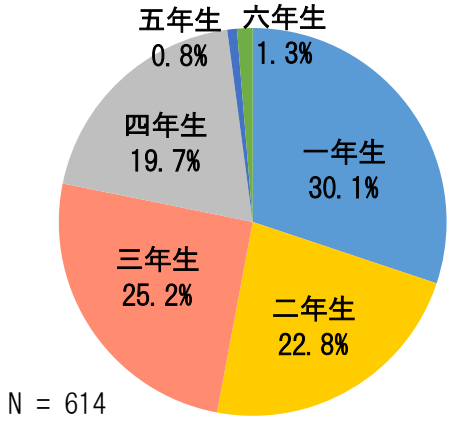
学部学生について

学部学生の属性

【学部】



【学年】



SDGs の理解度

学部学生

SDGs の内容の理解度は 8 割が高いと回答

●設問：SDGs の理解度

「内容をよく理解している/内容をある程度理解している」と回答した「学部学生」は、85.8%と高い割合になっています。

学部別では、工学部の「内容をよく理解している」（15.1％）、次いで国際地域創造学部（10.9%）となります。

SDGs の目標について講義などで理解を深めることで、実際は「内容をよく理解している」との潜在層が含まれている可能性もあります。

学部学生

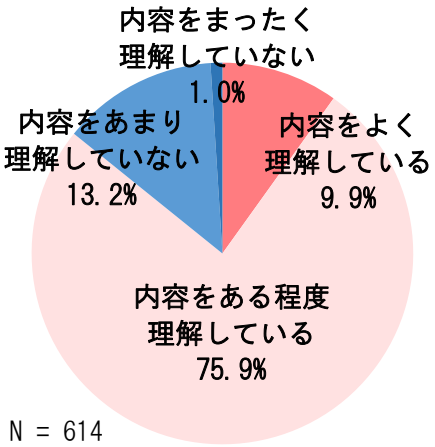


図33　SDGs の理解度

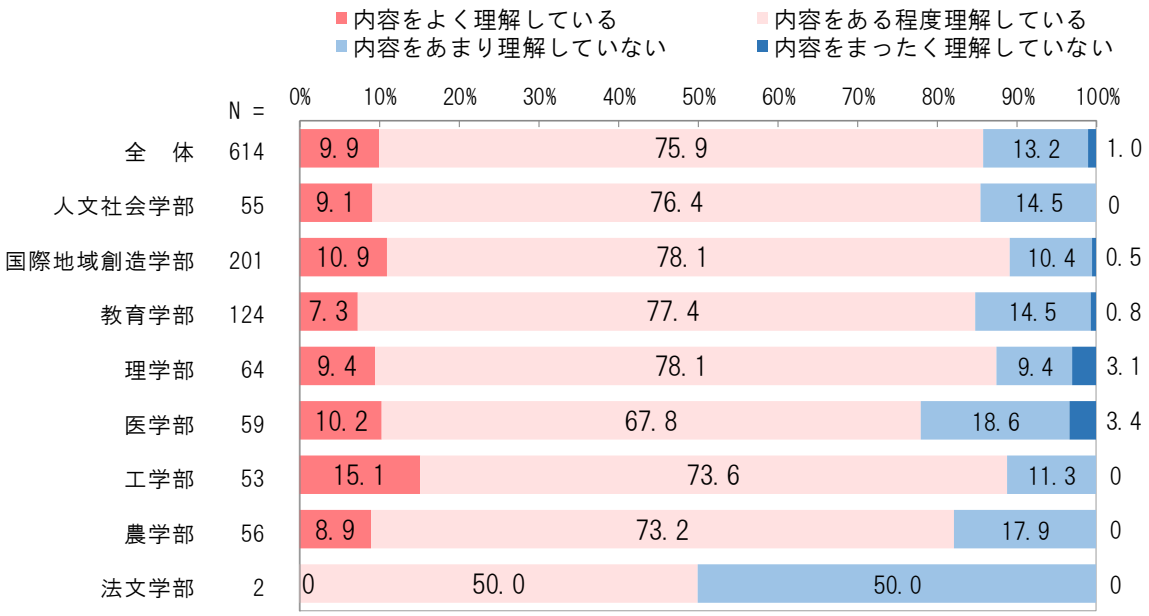


図34　学部別 SDGs の理解度

学年別では、SDGs の理解度は、一年生から四年生での「内容をよく理解している」割合は 1 割前後となります。中でも四年生の理解度の割合が最も低くなっています。
回答者数が少ないため参考ですが、「内容をよく理解している」六年生が 37.5%で最も高く、五年生が 20.0%と続きます。

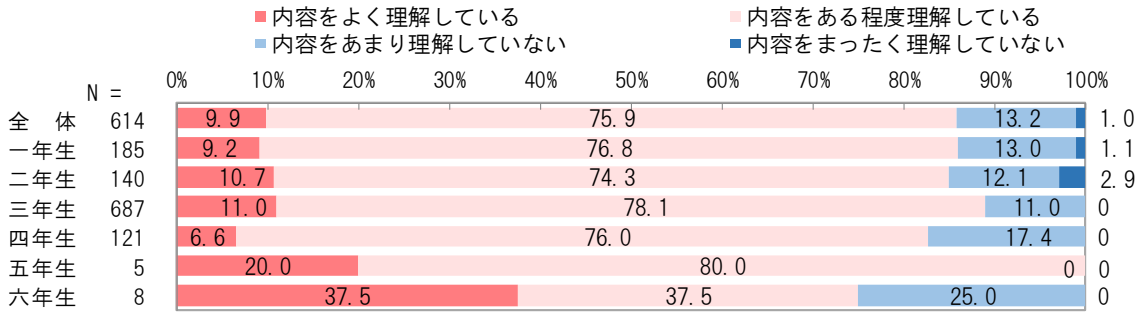


図35　　学年別 SDGs の理解度

●設問：SDGs の理解度×SDGs の課題解決のための取組

「内容をよく理解している」の 52.5%が課題解決の取組を実践しているが、「内容をまったく理解していない」の 66.7%は取組を実践しておらず、理解度と実践度が相関的であることがうかがえます。
「内容をまったく理解していない」学部学生に対して、引き続き講義や演習等で SDGs の知識の学習も必要と思われます。

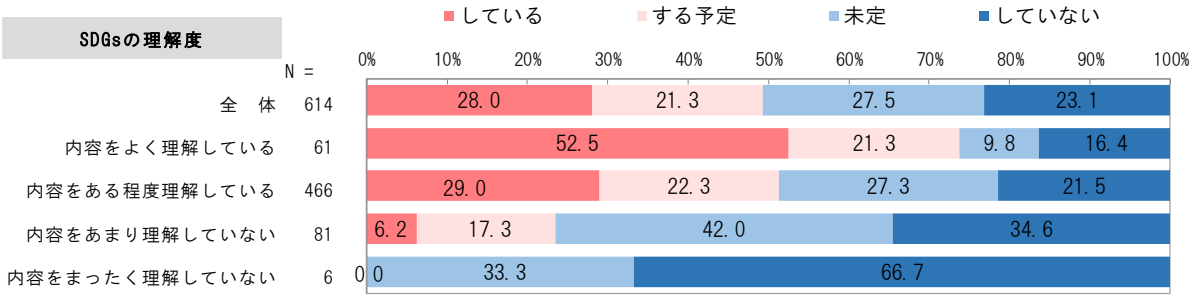


図36　　SDGs の理解度×SDGs の課題解決のための取組

●設問：SDGs の理解度×SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

学内や日常生活において SDGs の掲げているゴールとターゲットの多くに関わりがあります。日常生活と SDGs の目標は重なることが多いため、今一度 SDGs の講義などの機会を設け生活と関連付いているという発見を促すことが大切であると思われます。

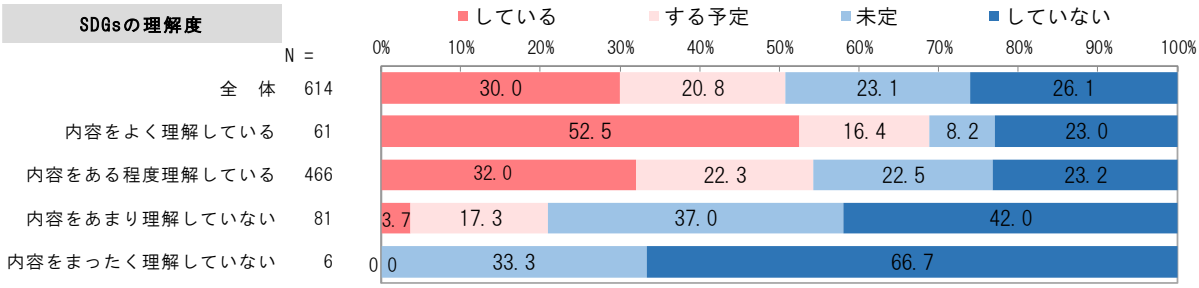


図37　　SDGs の理解度×SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

課題解決の取組

学部学生

課題解決の取組は２割が実施

●設問：SDGs 理解のための情報収集・学習の取組

学部学生では「している」の割合は 22.5%、「する予定」は 19.5%と取組に意欲がある学部学生は半数以下となりました。学部別で「している」の割合は、「農学部」で 32.1%、次いで「国際地域創造学部」で 26.9%と続きます。「していない」は「医学部」で 50.8%、「人文社会学部」で 38.2%となっています。

講義等や学内活動と関連付けられることで、主体的な学習意欲につながることも想定され、大学全体でのカリキュラム構築や意識醸成を図っていくことが重要です。

学部学生

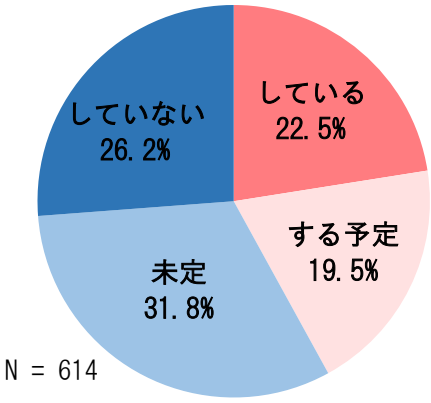


図38　SDGs 理解のための情報収集・学習の取組

		n	SDGs理解のための情報収集・学習 (%)			
			している	する予定	未定	していない
	全　体	614	22.5	19.5	31.8	26.2
学部	人文社会学部	55	18.2	14.5	29.1	38.2
	国際地域創造学部	201	26.9	20.9	29.9	22.4
	教育学部	124	15.3	21.0	39.5	24.2
	理学部	64	23.4	20.3	31.3	25.0
	医学部	59	13.6	8.5	27.1	50.8
	工学部	53	26.4	26.4	30.2	17.0
	農学部	56	32.1	21.4	28.6	17.9
	法文学部	2	－	－	100.0	－
学年	一年生	185	22.7	15.1	35.7	26.5
	二年生	140	21.4	25.7	30.0	22.9
	三年生	155	24.5	21.9	27.7	25.8
	四年生	121	21.5	16.5	33.9	28.1
	五年生	5	20.0	－	20.0	60.0
	六年生	8	12.5	25.0	25.0	37.5

表4　学部/学年別 SDGs 理解のための情報収集・学習の取組

●設問：SDGs の課題解決のための取組

SDGs の課題解決の取組については、学部学生では「している」が 28.0%、「する予定」は 21.3%と半数が課題解決の取組へ意欲を示しています。

「している」と「する予定」を合わせると、学部別では、「工学部」が 58.5%と最も高く、次いで「農学部」が 53.6%、「国際地域創造学部」が 51.3%と続きます。「していない」は「医学部」の 33.9%、次いで「人文社会学部」が 29.1%と続きます。

学部学生

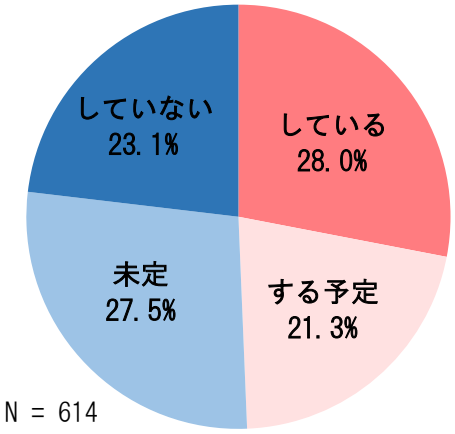


図39　SDGs の課題解決のための取組

		n	SDGsの課題解決のための取組 (%)			
			している	する予定	未定	していない
	全　体	614	28.0	21.3	27.5	23.1
学部	人文社会学部	55	30.9	16.4	23.6	29.1
	国際地域創造学部	201	28.9	22.4	24.4	24.4
	教育学部	124	23.4	21.8	36.3	18.5
	理学部	64	34.4	15.6	25.0	25.0
	医学部	59	23.7	16.9	25.4	33.9
	工学部	53	30.2	28.3	28.3	13.2
	農学部	56	26.8	26.8	26.8	19.6
	法文学部	2	50.0	-	50.0	-
学年	一年生	185	29.2	20.0	30.3	20.5
	二年生	140	28.6	20.0	28.6	22.9
	三年生	155	27.7	24.5	21.9	25.8
	四年生	121	26.4	20.7	28.9	24.0
	五年生	5	40.0	-	20.0	40.0
	六年生	8	12.5	37.5	37.5	12.5

表5　学部/学年別 SDGs の課題解決のための取組

●設問：同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

同僚、家族や友人などと SDGs について意見を交わすことについて、学部学生では「している」が 26.4%、「していない」が 46.4%となっています。

学部別では、「している」は「人文社会学部」で 34.5%、次いで「国際地域創造学部」で 30.8%となっています。

学部学生は、学内だけの課題に留まらず、日常生活でも小さなことから実施できることを、講義や課外活動等の機会を通じて身近に感じることが重要と思われます。

学部学生

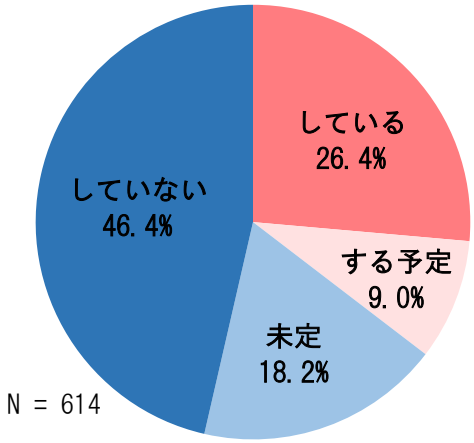


図40　　同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

		n	同僚、家族や友人などとのSDGsについての意見交換（%）			
			している	する予定	未定	していない
	全　体	614	26.4	9.0	18.2	46.4
学部	人文社会学部	55	34.5	5.5	7.3	52.7
	国際地域創造学部	201	30.8	9.0	14.4	45.8
	教育学部	124	22.6	7.3	28.2	41.9
	理学部	64	25.0	10.9	15.6	48.4
	医学部	59	16.9	11.9	13.6	57.6
	工学部	53	26.4	11.3	24.5	37.7
	農学部	56	23.2	8.9	21.4	46.4
	法文学部	2	-	-	50.0	50.0
学年	一年生	185	28.1	4.9	18.4	48.6
	二年生	140	27.9	14.3	13.6	44.3
	三年生	155	30.3	9.7	13.5	46.5
	四年生	121	15.7	8.3	29.8	46.3
	五年生	5	40.0	-	-	60.0
	六年生	8	37.5	12.5	25.0	25.0

表6　学部/学年別 同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

●設問：SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

自身の取組との関連付けについては、学部学生で「している」が 30.0%です。

学部別では、「している」は「理学部」で 42.2%、次いで「国際地域創造学部」で 32.3%と続きます。

自身の取組との関連付けを「していない」は、「医学部」で 42.4%と最も高くなります。医学部以外で「していない」割合は 2～3 割と近似しています。

学部学生

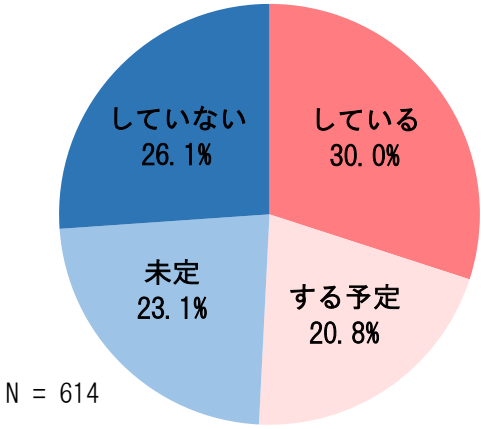


図41　　SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

		n	SDGsに合わせた自身の取組との関連付けについて（%）			
			している	する予定	未定	していない
	全　体	614	30.0	20.8	23.1	26.1
学部	人文社会学部	55	29.1	14.5	25.5	30.9
	国際地域創造学部	201	32.3	22.4	20.4	24.9
	教育学部	124	27.4	19.4	31.5	21.8
	理学部	64	42.2	17.2	18.8	21.9
	医学部	59	23.7	13.6	20.3	42.4
	工学部	53	22.6	35.8	20.8	20.8
	農学部	56	26.8	23.2	21.4	28.6
	法文学部	2	50.0	－	50.0	－
学年	一年生	185	33.5	18.4	25.4	22.7
	二年生	140	28.6	21.4	22.9	27.1
	三年生	155	31.0	24.5	17.4	27.1
	四年生	121	24.8	19.8	28.9	26.4
	五年生	5	40.0	－	－	60.0
	六年生	8	25.0	25.0	12.5	37.5

表7　学部別 SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

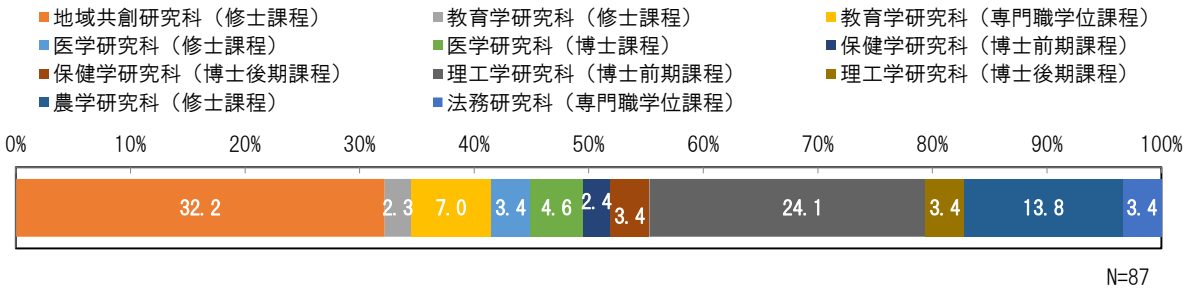
回答者の基本属性

大学院学生

大学院学生について

大学院学生の属性

【研究科】



SDGs の理解度

大学院学生

SDGs の内容の理解度は 8 割が高いと回答

●設問：SDGs の理解度

「内容をよく理解している/内容をある程度理解している」と回答した「大学院学生」は、81.6%と高い割合になっています。

研究科別では、回答数が少ないため参考値としての結果となります。

大学院学生では、専門分野に特化する傾向がありますが、全体的な視点でみると、大半は SDGs の目標と関連しています。この関連性を広く知らしめるために、SDGs と研究の取組に関する事例やセミナーが役に立つと考えられます。

大学院学生

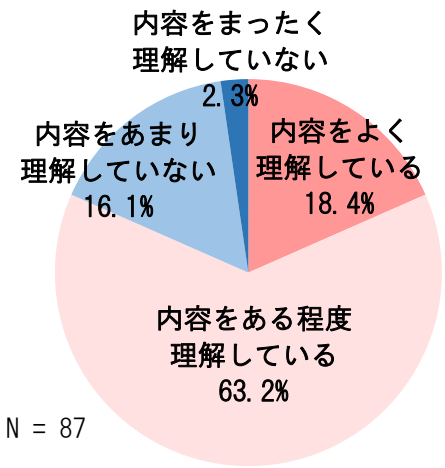


図42　SDGs の理解度

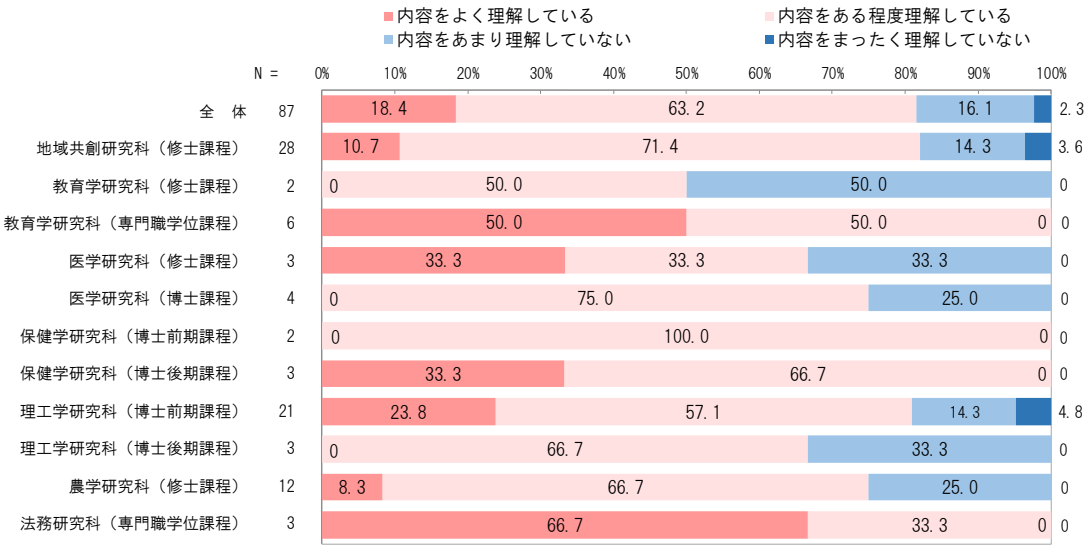


図43　研究科別 SDGs の理解度

●設問：SDGs の理解度×SDGs の課題解決のための取組

大学院学生では、内容の理解度と取組の度合は相関した結果となります。「内容をよく理解している」が81.3%の取組に対して「内容をある程度理解している」が32.7%と48.6ポイントの開きがあるため、SDGsのさらなる理解の機会を提供することで、SDGs がよく理解され「取組」の程度に変化が出ることが想定されます。

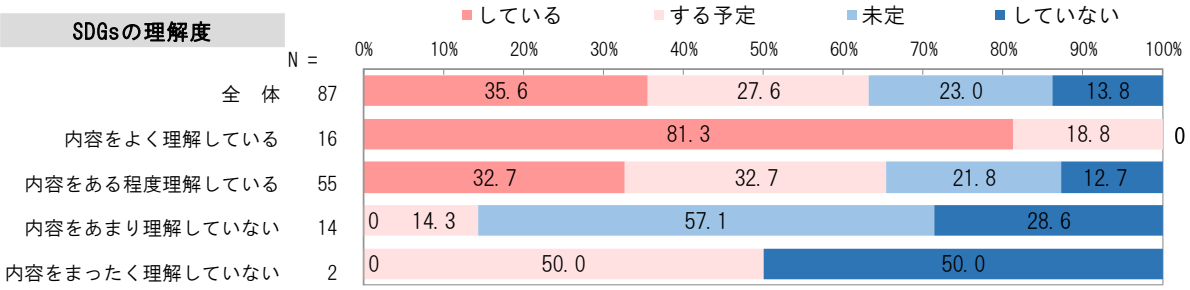


図44　SDGs の理解度×SDGs の課題解決のための取組

●設問：SDGs の理解度×SDGs のゴールと自身の取組との関連付け

学内や日常生活において SDGs の掲げている目標とターゲットの多くに関わりがあります。セミナーや取組事例の周知を図ることで、自身の生活と紐づいているという発見があると思われます。

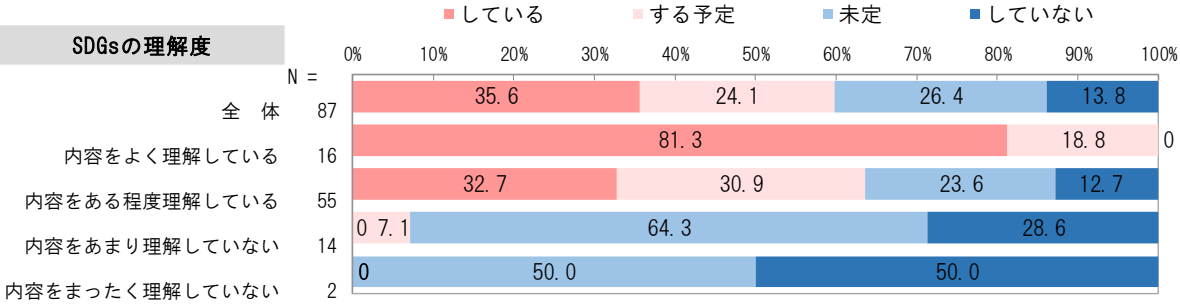


図45　SDGs の理解度×SDGs のゴールと自身の取組との関連付け

課題解決の取組

大学院学生

課題解決に向けた取組は、対象者の４割近くが実践

●設問：SDGs 理解のための情報収集・学習の取組

大学院学生では、情報収集・学習の取組を 36.8%がしています。

研究科別では回答数が少ないため参考値としての結果となります。

海外からの留学生も在籍していることから、研究領域がグローバルな分野にまたがるため、SDGs の目標になじみやすいことが考えられます。

大学院学生

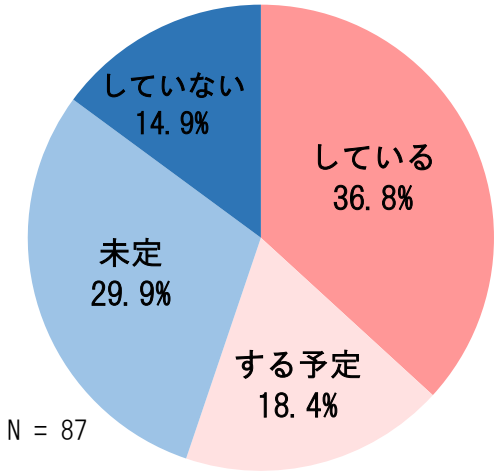


図46　SDGs 理解のための情報収集・学習の取組

		n	SDGs理解のための情報収集・学習 (%)			
			している	する予定	未定	していない
全　体		87	36. 8	18. 4	29. 9	14. 9
研究科	地域共創研究科（修士課程）	28	32. 1	32. 1	25. 0	10. 7
	教育学研究科（修士課程）	2	50. 0	－	50. 0	－
	教育学研究科（専門職学位課程）	6	50. 0	－	50. 0	－
	医学研究科（修士課程）	3	66. 7	－	33. 3	－
	医学研究科（博士課程）	4	－	－	50. 0	50. 0
	保健学研究科（博士前期課程）	2	－	50. 0	－	50. 0
	保健学研究科（博士後期課程）	3	100. 0	－	－	－
	理工学研究科（博士前期課程）	21	33. 3	9. 5	38. 1	19. 0
	理工学研究科（博士後期課程）	3	－	33. 3	66. 7	－
	農学研究科（修士課程）	12	41. 7	16. 7	16. 7	25. 0
	法務研究科（専門職学位課程）	3	66. 7	33. 3	－	－

表8　研究科別 SDGs 理解のための情報収集・学習の取組

●設問：SDGs の課題解決のための取組

大学院学生では、SDGs の課題解決のための取組を「している」は 35.6%となっています。
研究科別では回答数が少ないため参考値としての結果となります。

大学院学生

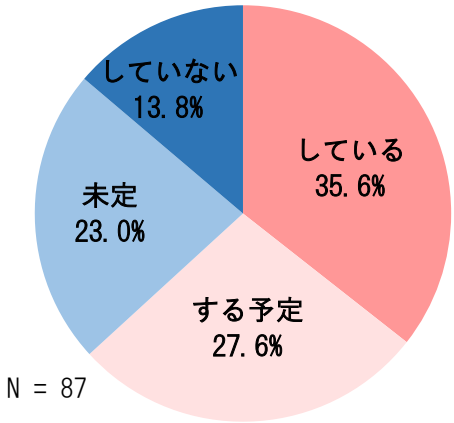


図47　SDGs の課題解決のための取組

		n	SDGsの課題解決のための取組 (%)			
			している	する予定	未定	していない
全　体		87	35.6	27.6	23.0	13.8
研究科	地域共創研究科（修士課程）	28	28.6	39.3	21.4	10.7
	教育学研究科（修士課程）	2	50.0	－	50.0	－
	教育学研究科（専門職学位課程）	6	66.7	－	33.3	－
	医学研究科（修士課程）	3	33.3	33.3	33.3	－
	医学研究科（博士課程）	4	25.0	－	50.0	25.0
	保健学研究科（博士前期課程）	2	－	50.0	－	50.0
	保健学研究科（博士後期課程）	3	66.7	33.3	－	－
	理工学研究科（博士前期課程）	21	38.1	19.0	23.8	19.0
	理工学研究科（博士後期課程）	3	－	66.7	33.3	－
	農学研究科（修士課程）	12	33.3	25.0	16.7	25.0
	法務研究科（専門職学位課程）	3	66.7	33.3	－	－

表9　研究科別 SDGs の課題解決のための取組

●設問：同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

大学院学生では、SDGs についての意見交換を「している」は 40.2%となっています。

研究科別では回答数が少ないため参考値としての結果となります。

日常生活でも気軽に SDGs に関する話題について話しやすい雰囲気やその意義を知ることが重要であると考えます。

大学院学生

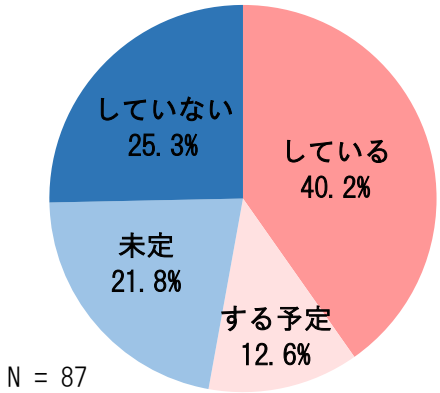


図48　同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

		n	同僚、家族や友人などとのSDGsについての意見交換（%）			
			している	する予定	未定	していない
全　体		87	40.2	12.6	21.8	25.3
研究科	地域共創研究科（修士課程）	28	32.1	17.9	25.0	25.0
	教育学研究科（修士課程）	2	50.0	-	50.0	-
	教育学研究科（専門職学位課程）	6	66.7	-	33.3	-
	医学研究科（修士課程）	3	66.7	-	33.3	-
	医学研究科（博士課程）	4	25.0	-	50.0	25.0
	保健学研究科（博士前期課程）	2	50.0	-	-	50.0
	保健学研究科（博士後期課程）	3	66.7	33.3	-	-
	理工学研究科（博士前期課程）	21	38.1	14.3	28.6	19.0
	理工学研究科（博士後期課程）	3	33.3	-	-	66.7
	農学研究科（修士課程）	12	33.3	16.7	-	50.0
	法務研究科（専門職学位課程）	3	66.7	-	-	33.3

表10　研究科別 同僚、家族や友人などとの SDGs についての意見交換

●設問：SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

大学院学生では、自身の取組の関連付けを「している」は 35.6%となっています。
研究科別では回答数が少ないため参考値としての結果となります。

大学院学生

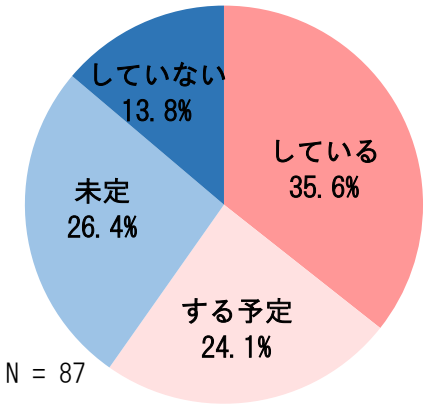


図49　SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

		n	SDGsに合わせた自身の取組の関連付け (%)			
			している	する予定	未定	していない
全　体		87	35. 6	24. 1	26. 4	13. 8
研究科	地域共創研究科（修士課程）	28	21. 4	35. 7	28. 6	14. 3
	教育学研究科（修士課程）	2	50. 0	-	50. 0	-
	教育学研究科（専門職学位課程）	6	50. 0	-	50. 0	-
	医学研究科（修士課程）	3	33. 3	33. 3	33. 3	-
	医学研究科（博士課程）	4	25. 0	-	50. 0	25. 0
	保健学研究科（博士前期課程）	2	-	100. 0	-	-
	保健学研究科（博士後期課程）	3	66. 7	33. 3	-	-
	理工学研究科（博士前期課程）	21	47. 6	14. 3	19. 0	19. 0
	理工学研究科（博士後期課程）	3	-	33. 3	66. 7	-
	農学研究科（修士課程）	12	41. 7	16. 7	16. 7	25. 0
	法務研究科（専門職学位課程）	3	66. 7	33. 3	-	-

表11　　研究科別 SDGs に合わせた自身の取組との関連付け

ま　と　め

持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は、2015 年 9 月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された 2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。
世界一丸となって、「誰一人取り残さない」の方針のもとに、17 のゴールと 169 のターゲットを設定しています。

本学では、SDGs への取組を本格的に推進するため、2020 年 2 月に SDGs 推進室を設置し、SDGs 推進室の下に置かれた「教育」、「研究」、「社会貢献」及び「業務・ガバナンス」の 4 つのワーキンググループを中心に SDGs に関連する取組を展開するとともに、2022 年 2 月には、SDGs 推進室の 4 つの WG 等が相互に連携し、本学におけるカーボンニュートラルに関する取組を推進することを目的として、「カーボンニュートラル推進チーム」を設置し活動を進めてきました。

本推進室の取組の一つとして、教職員及び学生の SDGs 意識啓発に向けた課題の把握と今後の SDGs の取組改善に資するため、SDGs に関するアンケートを実施しました。教職員は 4 回目、学生については 2 回目の実施となります。

SDGs の理解度は、前回(令和 4 年度)実施のアンケートと比較し、教員は 91.0%、職員は 76.3%と両方とも約 5%程度上昇しています。
これは、本学における SDGs に関する様々な取組により、職員の理解度が年々高まりつつあることが窺えます。一方で、「内容をあまり理解していない」、「内容をまったく理解していない」と回答した教職員については、SDGs に合わせた自身の取組との関連付けをしてないと回答した割合が高いため、どのような活動が SDGs に繋がるか等、シンポジウムやワークショップを通じた事例紹介等を共有する場が必要と思われます。

また、学部学生及び大学院学生については、約 8 割が「内容を理解している」との結果が出ていることから、SDGs 関連科目の提供等の取組が学生の高い理解度に繋がっていると思われます。一方で、課題解決の取組については、学部学生は 2 割、大学院学生は 4 割となっていることから、SDGs と各自の活動との関連付けを促す工夫が求められます。

なお、これまでの意欲的な活動に鑑み、その推進体制が学長のガバナンスの下にあることを明確にし、SDGs 推進を通して地域社会の課題解決に貢献する姿勢を学内外にアピールするとともに、今後の SDGs 推進に係る活動を持続的に発展させ、中期計画を強力に推進し、本学構成員の意識度をより向上させるため、令和 6 年 4 月 1 日付けで「SDGs 推進室」を「SDGs 推進本部」に格上げし、本学の SDGs 体制をより強化することになりました。

今回のアンケート結果を踏まえ、今後も本学構成員の SDGs に対する理解度の向上や当事者意識の醸成、SDGs に係る取組の改善を目指すと共に、学内外のステークホルダーとの連携・協働による様々な取組をさらに推進していきます。

令和５年度　琉球大学
SDGs に関する教職員・学生アンケート調査報告書
令和６年３月
発　行：琉球大学 SDGs 推進室
所在地：〒903-0213 沖縄県西原町字千原１番地
電　話：098-895-8024（ﾀﾞｲﾔﾙｲﾝ）
ＦＡＸ：098-895-8185
ウェブサイト：https://sdgs.skr.u-ryukyu.ac.jp/